
独裁生徒会長サクラン

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独裁生徒会長サクラン

【Nコード】

N8645X

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

時は新世界暦十二年。全世界規模のデータ管理システム「ギヤラクシュー」が整備され、汎用端末「エアコム」によって全人類が情報を参照可能となっていた。射干玉ぬはたまじよち除夜は都立神龍学園の高校一年生。初日から大遅刻した除夜の前に、生徒会長サクランが現れ、強制的に会長補佐にしてしまう。この学園では、生徒会長がすべての決定権を持っている。不満ならばデュエルを申し込み、戦って勝てばよい。勝った者が次の生徒会長となるのだ。そんな生徒会長の補佐として、除夜は様々な出来事に巻き込まれていくことになるのだった

o

ふわ……。

春の温かなそよ風が、僕の鼻腔をくすぐりながら通り過ぎてゆく。ぼかぼかと、体ばかりでなく心までをも温めてくれそうな日差しが、僕の全身をそっと抱きしめてくれているかのように包み込む。

住宅街の中を歩いていても、たまに植えられた桜がその姿を見せて、目を楽しませてくれるこの季節。

河川敷に沿った並木道なんかだったら、もっとたくさんの桜が花びらをこれでもかと言わんばかりにまき散らし、足先からもその桜色の存在を思う存分感じられるだろうけど。

でも僕は、ちょっと薄汚れた印象すら受ける静かなこの住宅街の雰囲気が好きだ。

幼い頃から慣れ親しんだこの町。今歩いているこの道は、いつも通っていた通学路からは少々離れていて、ほとんど足を踏み入れた経験はなかったように思う。

だけど今日からはそれこそ毎日のように、ここが僕の通り道となることだろう。

やがて、住宅が密集して立ち並ぶ地域を抜けると、畑や田んぼが目立つようになってきた。

その向こうには、周辺の景色と比べると若干高めで綺麗な建物の姿が見え隠れしている。

「それにしても、今日は暖かいな……。絶好の入学式日和だ」

徐々に視界に映り込んできた建物は、高校の校舎だった。塀に囲まれた広い敷地内に、いくつかの棟が建てられている。

都立神龍学園。

それがその高校の名前で、僕が今目指している場所でもあった。

今日は入学式。そして僕は、その高校に今日から入学する新入生のひとりだ。

真新しいブレザータイプの制服に身を包み、気分も晴れやか。温かな日差しも、僕を祝福してくれている。

正門が近づいてきているというのに周りに誰もいないのは、登校する時間とは完全にずれているから。

気持ちが高ぶって早めに来てしまった……というわけでは、もちろんない。

なにを隠そう、僕は初日から大遅刻をしてしまった身なのだ。

それなのに焦っていないのは、今さら焦っても仕方がないというものもあるけど、なんといいっても僕のものにも動じない、どつしりと構えた大らかな性格の賜物と言えるだろう。

「さてと、僕のクラスはどこかな」

大遅刻なんてまったくこれっぽっちも気にせず、クラス発表の貼り紙などがしてあるであろう体育館横の掲示板辺りをきよきよろと見回していると、その人は風のごとく、いや疾風のごとく、いやいや嵐のごとく、突如として目の前に現れた。

「おい、そこのお前！ 新入生だな！？ 入学式から遅刻とは、いい度胸してるじゃないか！」

生活指導の先生であるかのような物言い、雷鳴のごとき大声を伴い現れたその人は、しかし、教師ではなかった。

ブレザー姿。

襟もとはネクタイではなくリボンが結ばれ、視線を下げればスカートがそよ風に揺らめいている。

両手を腰に当て、リボンの上からでもそのボリュームが存分に感じられる大きな胸をビシツと張って威風堂々と立っている姿は、女性ながらに凄まじいほどの凛々しさをかもし出していた。

サイドテールにまとめた長く綺麗な黒髪がそよ風にたなびく様も、その凛々しさを際立たせる要因となっているだろうか。

どうやら彼女は、この学校の子生徒のようだ。

とすると、風紀委員とかそういった立場の人で、遅刻した僕を注意しに来た、といったところか。

おそらくは上級生なのであろう彼女は、僕の返事がないのを見ると、ツカツカと早足でにじり寄ってきた。

少々つり上がり気味ではあるものの切れ長の目は眼光鋭く、眉尻も上がり眉間にはシワもできている。

怒りの形相、いや般若の形相、はたまた悪魔の形相か。

僕は思わずあどさる。

「逃げるな！」

再び落とされたいかずちによって、繰り出されつつあった逃げ足は一瞬で止まる。

悪魔の形相をした彼女は、もう僕のすぐ目の前まで迫ってきていた。

そんな状況にあっても、その女子生徒から春風に乗ってふわりと微かに漂ってくる爽やかな心地よい香りに、つい頬が緩んでしまう。

背の低いほうである僕よりも、彼女の視線のほうが、わずかに上……。

彼女は右手を伸ばし、人差し指と中指の二本を使って僕のアゴを持ち上げると、ぐいっと顔を近づけた。

目と目が合う。

へびに睨まれたカエル状態の僕。

この胸のドキドキは、きつとトキメキとかそういう類のものではないだろう。

「お前、名前は？」

すぐ目の前から質問を投げかけられ、彼女の吐息が僕の鼻先をかすめる。

とはいえ、今の僕は、恐怖の念に支配されている状態。

怯えた視線を返しながら、素直に答えとなる言葉を紡ぎ出すことしかできない。

「射干玉……除夜です……」

「除夜、か……。射干玉という名字も変わっているが、名前のほうも独特だな」

「はい、よく言われます」

実際のところ、変わった名前なんて、あまりいいものではないと思う。

絶対に最初は間違われたり読めなかったりするし。

僕の場合は、とくに名字のほうか。たいてい、なんて読むの？と訊かれてしまう。

ただ、変わっているからこそすぐに覚えてもらえる、という利点もあるかもしれないけど。

「除夜の鐘……。百八つの煩惱の回数叩くというやつだな。とすると、お前は煩惱だらけの人間ということか？」

初対面なのに失礼な、と思わなくもなかったけど。でも、こういったことも、よく言われてしまうことだ。

だいたい除夜ってだけなのに、どうして鐘までつけてしまうのか。除夜というのは、大晦日の夜のことを表しているだけだということに……。

それに除夜の鐘だとしても、百八回鳴らすというのは、百八つの煩惱を振り払うという解釈の他にも、十二月二十四節氣七十二候の一年間を示すとか、四苦八苦で四×九＋八×九で百八だとする説なんてのもあるというのに。

あまりに間違われるので調べまくった知識が、頭の中を駆け巡る。だけどカエルの僕は、へびな彼女に齒向かえない。

「……そんなんじゃないです……」

一瞬の沈黙ののち、せめてもの抵抗として、小さくこう答えることだけしかできなかった。

「すまん。少々調子に乗りすぎた。気を悪くしないでくれ」

怯えきった僕の様子を見て、さすがに罪悪感を覚えたのか、彼女は僕のアゴから指を離し、正常な会話位置を取るよう一步下がった。

そして一旦のどを鳴らすと、こつ名乗りを上げた。

「私はこの学園の生徒会長をしている、二年の華神桜蘭かがみさくいらんだ。よろしく頼む」

なるほど、生徒会長だったのか。

立場上、風紀委員よりもさらに上、ということになるわけだし、入学式からの大遅刻にお叱りを受けたのも頷ける。

よく見れば、彼女の右腕にはしっかりと、生徒会長と書かれた腕章がつけられていた。

……と、あれ？

でも今つて、ちょうど入学式が行われている最中では……。

確か、入学式と始業式を同時に行うスケジュールだったはずだから、二年生の先輩だとしても、会場の体育館にいななければいけない時間帯なんじゃ……。

そんな考えは表情にも出ていたのだろう、「どうした？」という会長の問いかけに、僕は率直な疑問をぶつけてみることにした。

「ふむ……。なんだ、そんなことか」

会長は、事もなげに答えを返してくれた。

「私は入学式だとかあんな面倒な式なんぞに出たくない。だからエスケープした。それだけだ」

それは、「当然だろう？ なにか問題あるか？」とでも言わんばかりの、堂々とした答えだった。

「生徒会長というのはだな、全校生徒のトップなのだ。ゆえに、どんなワガママも許される。すべてが自分の思いどおりになる、夢のような役職なのだ」

とんでもないことを言い放った会長。

「そ……そんなことで、いいんですか!？」

「うむ、いいのだ」

僕が声を荒げて、会長は涼しい顔。

そうか……この人、なにを言っても無駄な人種なんだ。

とはいえ、睨まれ続けながらもどうにか耐えていると、カエルでもどうにか慣れてくるものなのか、それとも会長が言葉を返すだけで、どうやら暴力には訴えてこないようだ判断したからか。

ともかく僕は、徐々に反撃ののろしを上げ始めていた。

「だいたいそんな自分勝手な態度じゃ、他の役員たちだって黙っていないでしょう!？」

おそらく常識的と思われる僕の意見にも、会長はとくに慌てる様子もなく。「なにを言っているのだ、お前は」といった感じで、若干呆れたような顔を向けてくる。

「お前……さては、学園の規則だとかそういう資料には、まったく目を通してないな?」

「え……?」

言われて、はたと考える。
そんな資料、あったっけ？

もともと僕がこの学校を受験した理由はふたつ。
ひとつは単純に家から近かったから。

そしてもうひとつは、こちらの理由のほうが強いんだけど、幼馴染みの女の子に言われたからだ。

家が隣同士で、幼稚園からずっと一緒だった女の子。高校受験の志望校を決める際に、どういうわけか一緒の学校を受験しようと言い出した。

まあ、将来の夢なんかもまだ見つけられていない僕としては高校なんてべつにどこでもよかったし、彼女の申し出を素直に聞き入れたのだけだ。

考えてみたら、ここがどんな学校なのか全然知らなかった……。

創立から十年ちょっとと新しい学校ではあるけど、学業のレベルとしてはそれなりに高いらしく、親も反対することなく、すんなりと受け入れられた感じだった。

そういえば今朝家を出るとき、「いきなり遅刻なんて大丈夫かしら？ 監禁されたり拷問されたりしない？」などと、なんだか物騒なことをお母さんから言われたような……。

「安心しろ。監禁だの拷問だの、そんなことはありえない。……今は、な」

ついつい口からこぼれてしまっていた僕のつぶやきを聞き咎めると、会長はそう言った。

……え？今は……？

一瞬、背筋が凍る。

じゃあ、今じゃなかったら……以前のこの学校だったら、それもありえたってこと？

「……本当に、なにも知らないんだな」

再び漏れ出していた怯えを含んだ僕の言葉に、会長はさらに答えを返す。

「ま、実際、そこまでやろうとしたヤツは、すぐに蹴落とされることになったわけだが」

????

僕にはどうも、この神龍学園というものが、よくわからなくなってきた。

いったいどういう学校なのだろう？

「学校としては、さほど変わっているわけではないな。少々レベルの高い進学校、といったところだ。……ただ」

「ただ？」

「さつきも言ったように、生徒会長に学園に関するほとんどすべての決定権が与えられる、いわば独裁政権的な校風になっているのだ！」

ドツゴオオオオン！

両手を腰に当て、再び大きな胸を張って偉そうにふんぞり返っている会長の背後には、ど派手な爆発エフェクトのようなものが見えた気がした。

「つまり、私がこの学園のルールであり、そして神である、ということだな」

わざわざ言い直す必要もないと思うのだけど、というツッコミは飲み込んでおく。きっと、無意味だから。

「ついでに言うと、さっきお前が心配していた、他の役員たちが黙っていない、といったことも、ありえない」

「……絶対的権力でねじ伏せるから、ですか？」

なんとというか、もう完全に諦めモードに入った僕は、力を失った声で尋ねる。

「いや、そうではない。そもそも、他の役員自体がないからな。生徒会長のひとり舞台というわけだ」

「それって、生徒『会』とは呼べないのでは……」

「ふむ、まあ、確かにそのとおりだな。しかし、生徒長では語呂も悪いし、生徒会長という呼び名で構わないだろう」

「いや、べつに呼び名の問題じゃないんですが……」

うーん、なんとというか、僕はとんでもない高校に入学してしまったのではなからうか。

今さらそう思っても、あとの祭りというものだろうけど。

「で……でもそれじゃあ、なにかと大変なんじゃないですか？」

生徒会といえは、様々な学校行事に関して詳細にわたっているりと決めていかなければならない役職のはずだ。

先生方がある程度サポートしてくれるにしても、ひとりの生徒に

押しつけていい仕事量ではないように思う。

「おお、そうなのだ！ わかってくれるか！ いやあ、私の目に狂いはなかったということだな！」

「え？」

急にランランと目を輝かせ、会長は両腕を胸の前に組んで、うんうんと頷き始める。

「大変なのだよ、私は。そういうわけで、射干玉除夜、お前を拉致…… もとい、生徒会長の補佐役に任命する！」

「え……え……と……」

この人今、拉致って言った！

「私の片腕となって、せいぜい頑張って働いてくれたまえ！」

「あ……あの……」

働くって、いったいなにをさせようというんですか！？

「喜ぶがいい、これはとても名誉なことなのだぞ？ 私が楽できるように…… もとい、全校生徒のために！」

「だから、その……」

会長、説得力、なさすぎですってば！

僕の悲痛な叫びが言葉として飛び出すことはなく、次の瞬間には、

「除夜、今後ともよろしく頼むぞ！」

ぎゅっ、と僕の右手は会長の両手の温もりによって包み込まれて

いた。

「それでは、端末を開いて、補佐としての登録をしておけ」
「……はい」

僕は仕方なく、右手を目の前に出し、人差し指をすっと横にスライドさせ、端末のウィンドウを開く。

今現在、全世界のすべて国で、『エアコム』という汎用端末がひとりひとつずつ支給されている。

国民ひとりひとりの名前や年齢などの個人情報を初め、職場や学校での役割、友人関係、果ては所持金まで、すべての情報がこの端末によってデータ管理されている。

実際には、この端末は中央コンピュータに登録してある情報の呼び出しと、情報の書き換えなどを行うためのツール、ということになるわけだけだ。

ウィンドウは目の前に半透明の状態で見れる……ように見える。ように見える、と表現しているのは、物理的にモニターが出現するわけではないからだ。

利き腕に巻きつけられた腕輪……というよりも、昔流行ったミサングに似た形状と言ったほうがわかりやすいだろうか。

これが、支給されている端末 エアコムの本体だ。
指先の動きに応じて、ウィンドウが出現させたり消したり、各種ウィンドウの操作を行ったりする機能がある。

腕を通して脳に微弱な電気信号を送り、目の前にあたかもウィン

ドウが出現したように見せる能力とセットになったこの端末を通して、様々な個人情報管理されている。

正確に言えば、個人情報の管理だけに留まっていけないのだけど、その辺りは必要になったらおいおい語ることにしよう。

そういった様々な情報が扱え、また、電話やメールなんかの機能もあり、お店では電子マネーとしての役割も担う、生活の必需品と言っても過言ではない端末、それがエアコムだ。

なお、このエアコムによって目の前に開かれるウィンドウは、『エアウィンドウ』と呼ばれている。通常は単にウィンドウと呼ばれることも多いのだけど。

僕はそのエアウィンドウを開き、自分自身の情報の中から、関係性のカテゴリを選択する。

そこには、現在の自分の立場などが登録されている。今表示されているのは、都立神龍学園一年、というデータのみだ。

目の前に出現した（ように見える）ウィンドウの中で、表示されている情報の辺りを軽く人差し指で触れる。

すると、詳細な情報として、生徒会長補佐という役割のデータが追加された。

どうやら頭の中で考えていることを脳の電気信号から読み取り、追加されるシステムになっているらしい。

自動で勝手に情報の追記をせずに、エアウィンドウを開いてデータにタッチするなど指先の動作が必要となっているのは、誤った情報追加を防ぐためだとか。

考えたことがすべてデータとして中央コンピューターに登録されてしまったら、妄想なんかまで追加されてとんでもないことになるだろうし。

「よし、登録完了したみたいだな。こちらからも確認した」
「はい」

会長の言葉に頷く。

登録された個人情報には公開レベルというのが設定されていて、顔見知り程度以上の関係性であれば、名前や年齢といった基本情報は誰でも参照することが可能なのだ。

と、不意に騒がしい声が風に乗って漂い始めた。
視線を巡らせてみれば、体育館から出た生徒たちが渡り廊下を通って校舎へと向かって並んで歩いていく姿が確認できた。
体育館脇の出口からは、入学式を見に来た新入生の親御さんが出てくるのも見える。

「どうやら、入学式が終わったようだな」
「そうですね」

果たして僕は、今ここに居ていい身分なのだろうか？

「とりあえず、補佐の件は了解しました」

というよりも、拒否権なんてなさそうだし。

心の中で愚痴をこぼしつつ、僕は会長に言う。

「うむ」

「そういうわけで、僕はこれで失礼します。さすがに教室には顔を出さないよ……」

「おお、そうだな。それでは、私も同行しよう」

「え？」

どうして二年生の会長が僕のクラスにまで同行しようとするんだ？
疑問は顔に表れていただろうけど、会長は意に介することもなく。

「ほら、行くぞ」

彼女は僕の手を取り、スタスタと歩き始めていた。

「ふむ、除夜は……一年C組だな」

会長はエアコムのウィンドウを操作し、神龍学園の情報サイトからクラス分けを確認していた。

全世界のほぼすべての情報が、このエアコムで管理されている現在、学園のクラス分けもこうして端末から確認できるということ、僕はすっかり忘れていた。

もっとも、機能や情報量の多さから、エアコムを使いこなせない人も中にはいる。

そういう人のために、体育館横の掲示板にはクラス分けの紙が貼り出されているのだけだ。

「私は二年A組のようだな。ま、あまり興味はないが」

「いや、そこは興味を持ちましようよ……」

クラスメイトが聞いたなら不快に思いそうなセリフを放ちながら、会長はさっさと昇降口へと向かった。

「お前も早く上履きに履き替えて準備しろ。一瞬だけとはいえ、クラスに顔を出すわけだからな」

「え？ 一瞬だけ？ それってどういう……」

「なにをグズグズしている。早くしろ」

僕の質問の言葉なんて、会長にとっては雑音の一種でしかないの
だろうか、まったく答える気配さえ見せず、ただただ急かされるば
かりだった。

入学式が終わり、最初のホームルームを始めたばかりであろう一年組の教室に、突然の乱入者が現れた。
それはもちろん、会長と僕なのだけだ。

呆然とする生徒たちと担任の先生の視線を一身に受けながらも、まったく怯む様子すらなく、会長はずかずかと教壇へと歩を進める。悠然とした態度は、さもそれが当たり前前の行動であるかのよう。担任の先生が、あまりの勢いに教卓前の定位置をあっさりと譲り渡したところからも、その堂々たる姿が想像してもらえらるだろう。

そして、腕を引つ張られながらひよこひよここと教室へと入ってきた僕は、会長とは正反対に、とつても情けなく見えたことだろう。

……と、微妙などよめきが広がり始めている生徒たちの中に、知り合いの顔が混じっているのを発見する。

幼馴染みの柏葉かしわばちまきだ。

一緒のクラスだったのか。クラス分けの情報をゆっくり見ている時間もなかったから、全然気づかなかった。

彼女は微かに首をかしげながら、訝しげな視線を送ってくる。

あんた、なにやってんの？ っていうか、その女、誰？ とでも言いたげな目だ。

とはいえ、ただ引つ張られるだけの僕に答える余裕なんてない。
バン！

会長が教卓に両手をつく。どよめきが一瞬で静まる。
そしてコホンと咳払い。

「二年A組、華神桜蘭。この学園の生徒会長だ」

会長は凜とした声を張り上げ、手短な自己紹介を済ませると、続いてこう宣言した。

「このクラスに所属するこいつ　射干玉除夜は、私のものとなった。というわけで、よろしく頼む。以上！」

今までの横暴な態度から、なんとなく想像はできていたけど。

どうやら僕は会長にとって、補佐というよりも、手下とか下僕とか、そういう扱いのようだ。

それにしても、『私のもの』って……。その言い方はないんじゃないかならうか。

などと考えはしたものの、僕に反論するような権限なんてないんだろうなと、黙って成り行きを見守る構えに入る。

担任の先生も生徒たちも、呆然としながら、会長と僕の姿を交互に眺めるばかり。

同じ中学から来た生徒も中にはいるようだけど、クラスメイトとはいえ基本的にはまだほとんど誰も僕のことを知らないのだから、自然な反応と言えるのかもしれない。

このまま僕が『会長のもの』という認識で決定づけられるかと思っただけだ、

「ちょ……ちょっと！　私のものって、どついうことですかっ!？」

ガタツと大きな音を立てて椅子から立ち上がった生徒が、ひとりだけいた。

「幼馴染みのちまきだ。」

「言葉どおりの意味だが？」

平然と答える会長。

そ……そんなふうに言ったら、絶対に違う意味で取られます！

「な……！」

絶句するちまき。

うん、完璧に誤解している目だ。幼馴染みだからよくわかる。いや、そうでなくても簡単にわかりそうだけど。

会長の宣言は、さらに続いた。

「それと、除夜には通常の授業はすべて生徒会室で私とともに受けてもらう」

授業はもちろん、それぞれの教室で行われる。

通常は自分の教室で授業を受け、必要があれば理科室など実験設備のある教室に移動するわけだけど。

大抵どこの学校でも、通常の授業においては、許可さえもらえば教室以外の場所からでも受けることができる。

それは、エアコムの機能があるおかげだった。

教師が授業する姿は、エアコムの映像転送機能によってどこからでも見ることが可能。

担当教師から許可を受けた生徒は、どこで授業を受けてもいいことになっている。

なお、教科書類はすべてエアコム内にあらかじめダウンロードされ、データとして入っているので、わざわざ持ち運ぶ必要もない。

また、教師が黒板に書いた内容もそのままデータ化されて、エアコムから参照可能となる。

黒板に書かれた内容以外にメモしておきたい場合でも、エアコム内の個人用ノートに記述できるようになっている。

教室移動の必要がある教科や体育なんかは、さすがにエアコムの機能ではまかなえないため、全員が同じ場所に集まって授業を受ける必要があるけど、それ以外の教科であれば保健室登校の生徒でも受けられる仕組みになっているのだ。

「そ……そんな……！　せつかく同じクラスになれて、一緒に授業を受けられるって思ってたのに……！」

ちまきが、なんだかすぐく残念そうな顔で会長を睨みつけながらつぶやく。

幼馴染みで小学校からずっと僕と一緒に学校の学校に通っているちまきだけど、運悪く一度も同じクラスになったことがなかった。

そっか、ちまき、そんなに楽しみにしてたのか。

クラスが違ってても、一緒に登校したり、頻繁に僕の部屋に押しつけてきたり、今までだってなんだかんだでかなりの時間、一緒に過ごしてきたというのに。

「というわけで、これは私のものとなった」
「いや、僕は会長補佐ですから。会長のもの、ってわけじゃないです」

所有物扱いが続いたことへの反抗の気持ちもあつたけど、ちまきに誤解されたままだととにかくと厄介なので、僕はきっぱりと言いつつ。

「会長補佐……そっか、なるほど、そうなんだ……」

と、納得しかけたちまきだったものの、すぐに会長が余計なことをつけ加えた。

「補佐というのは、私の手となり足となり働いてくれる存在だろうか？ 私のためにどんなことでもしてくれる役割、というわけだ。そうすると、やっぱり私のものと言っていいのではないか？」

「ど……どんなことでもって、なにをさせるつもりですかっ！？」

ちまきの言葉に、会長はニヤリと笑う。

「さて……なにをしてもらおうか。私は有能だからな、仕事の手伝いはさほどいらないだろう。ということは、私の欲求を満たすための手伝いをしてもらおうというのが、有効な使い方なのかもしれないな」

「な……！？」

「たとえば、あんなことやこんなことや……むふふふ」

「ちょ……なに言ってるんですか！？ そんなの、補佐の役目じゃないです！」

「ほほう？ そんなのとは、どんなことだ？ ちゃんと詳しく言葉にして言ってみる」

「うっ、それは……！」

会長は、ちまきをからかって楽しんでいる様子がうかがえる。

意外と素直……というか単純なちまきは、そのことに気づいてい

ないみたいだけど。

「ともかく、私は生徒会長だからな。すべては私の思いどおりになる。それがこの学園のルールなのだ！」

「お……横暴です！……先生も、なんとか言ってください！」

ちまきは、自分ひとりでは会長の勢いに勝てないと悟ったのか、黙って成り行きを見守っていた担任の先生に協力を求める作戦に出たようだ。

「ただ、

「ごめんなさいね、わたくしには、なんにも言えませんが。この学園では、生徒会長は絶対の存在ですから……」

残念ながら先生は、ちまきの助け舟とはなりえなかった。

「そ……そんな……」

へなへなとその場に崩れ落ちるちまき。

「ふっふっふ、除夜を奪いたければ、いつでもかかってくるがいい。私は逃げも隠れもしないからな」

「べ……べつにあたしは、除夜ちゃんなんて関係なくって、会長さんのやり方が横暴だって言ってるだけで……！」

ちまきはなんだか赤くなりながら、焦り声を響かせる。

「ふっ……除夜、お前はあの子から『ちゃん』づけで呼ばれているのか」

「ええ、まあ。幼馴染みなので。僕のほうは、ちまきって呼んでま

すけど」

「そうか。仲がいいんだな」

「そうですね、割と」

「割とってなによ!? それに除夜ちゃん、なに冷静に会話してんのよ!? 会長さんの言いなりで、本当にいいわけ!？」

なにやらちまきの怒りの矛先が、僕のほうにまで向いてきてしまった。

「僕はべつに、それも悪くないかな、とか」

「な……なによ、それ!? あっ、もしかして会長さんが、その……び……美人だから……?」

ちまきは、なんだかちよっと悲しそうな声で、そんなことを尋ねてくる。

「え? 美人……? ん、全然考えてなかったな……。単に変な人とは思ってなかったし」

「……除夜、お前、なかなか失礼なヤツだな。まあ、今回は不問としておくが」

僕の言葉に、会長が一瞬だけムツとしていたけど、それはともかく。

「だけど……除夜ちゃんはこのクラスの生徒で、だから、ここで授業を受けるのが自然で……」

ぼそぼそと意見を述べるちまきの声は、さっきまでの勢いを完全に失くしていた。

「悪いが除夜には、私の補佐としての役目を優先してもらおう。報告は以上だ」

勝ったと悟ったのだろうか、バシツと言いきった会長は、僕の腕を強引に引つ張って教室を出る。

「あう……除夜ちゃん……」

最後に見えたのは、とても寂しそうにうるうるした瞳を向け、僕をつかまえようとするかのように右手を前方にかざしているちまきの姿だった。

時は新世界暦十二年。

こうして僕は、生徒会長の補佐になってしまった。

狭い生徒会室で、会長とふたりきり。

ちまきに言われるまで気にしてなかったけど、会長ってよく見れば美人だし、なんだか甘くていい匂いもするし。

このドキドキは……恋？ ……それとも……やっぱり、恐怖心かな……？

次回、第二話、ドキドキ生徒会室！

……会長って、こんなパンツはいてるのか……。

今から十一年ほど前、コンピューター革命が起こった。世界中のすべての国の情報がコンピューター管理されるようになったのだ。

アメリカが主導となり、日本やヨーロッパの先進国、成長著しい中国、IT技術に強いインド、オンライン技術に長ける韓国なども協力し、全世界規模の巨大な情報ネットワークシステムが構築された。

セキュリティの関係上、中核となるシステムはすべてアメリカ側で管理、ブラックボックス化されている。

その中核部分に関しても、いくつもの企業で一部ずつを開発し、システムの全体像は誰にも詳細には把握できないようになっていったらしい。

この全世界規模の情報システムは『ギヤラクシー』と呼ばれ、多くの発展途上国も含めたすべての国に対応できるよう、何年にもわたる準備や運用実験を経て、始動したのが今から十一年前となる。ギヤラクシーのシステムを起動した瞬間のことを『ビッグバン』と呼び、その年を新世界暦元年とした。

全世界規模のシステムなんて、トラブルが起こらないはずはない。そんな懐疑的な意見もあった。

でも、新世界暦となってから今年で十二年目。開始当初は小さなトラブルくらいはあったはずだけど、これまでのところ大きな混乱が起こるようなトラブルは発生していないという。

それだけ、しっかりしたシステムとして構築されているのだろう。

ギャラクシーで管理されている情報は、公開レベルによる制限はあるものの、基本的に全世界のすべての人が汎用端末によって参照できるようになっている。

その汎用端末が、すべての人に国から支給されている、ミサंगाに似た形状の『エアコム』だ。

国から支給されているものだけど、実際にはギャラクシー管理の中心となっているアメリカによって作られた端末で、これが全世界の国に送られている。

前にも言ったとおり、名前や年齢などの個人情報に加え、職場や学校での役割、友人関係、所持金やら主な所持品までもがデータ化されている。

それだけだとプライベートがまったくない状態となってしまうけど、個人情報に関してはどこまで参照可能かのレベル設定も変えられるので、通常は問題ない。

友人関係であれば、名前や年齢、家の住所などを参照できるし、親友ともなれば、所持品なんかも公開できる。

レベル設定の効果範囲は交友関係だけに限られているわけではなく、役職や肩書き、立場などによっても扱いは変わってくる。

たとえば学校の先生であれば、自分のクラスの生徒の名前や住所などは参照可能になる、といった具合だ。

ただしその場合でも、個人側の設定が優先されるので、本人が拒否設定しているようであれば非公開となる。

この辺りの個人情報の取り扱いに関しても、これまでに大きな混乱や問題は起きていない。

しいて問題視されるとすれば、端末を使っていつでも情報を引き出せるため、個人情報自体が軽視され始めていることくらいだろうか。

だけど、これが当たり前となっている僕たちの世代にとって、あまり実感がないというか、気にしていないのも事実だったりする。多くの人が日記やブログをエアコムでギャラクシーのデータ上に記載し、自分のプライベートを赤裸々に明かしているわけだし。

ちなみにエアコムを使うと、頭に文章をイメージしてエアウィンドウにタッチする操作だけで、ブログの更新なんかもすぐにできてしまう。

だからかなり楽に書けるようで、日記が三日と続かない人でもブログなら続けられるようになったという話も聞く。

僕の場合、そのエアコムでのブログすら面倒で実践できていない状態だったりするのだけど……。

そんなブログなどだけでなく、各施設や団体、会社、個人などのホームページなんかも、ギャラクシー上に置かれていて閲覧可能となっている。

インターネット全体が、ギャラクシーのシステムによって包括されていると言っていていいだろう。

これらは、『ギャラクシーネット』と呼ばれることもある。

すべての情報を扱う中央コンピュータはアメリカの首都ワシントンD.C.にあるとされている。

とはいえ、実際にどうなっているのかは明かされていない。

全世界の情報を一手に扱っているわけだし、一台、もしくは数台程度のスーパーコンピュータではまかなえないはずだ。

データのバックアップ体制なども考えると、アメリカ全土の数十ヶ所に分散配置された、総合するととてもない規模のシステムなのでは、という憶測も飛んでいるとか。

でもコンピュータでの情報管理が行き届いた現在であっても、僕の両親が言うには、便利になったのは確かなものの普段の生活はさほど変わっていないらしい。

ギヤラクシーのビッグバンがあったのは、僕が四歳の頃。それ以前の生活なんて、僕にはよくわからないのだけだ。

そんな新世界暦十二年の現在、新世界暦と同様、めでたく創立から十二年目を迎えたのが、僕たちの通う都立神龍学園だ。

新たな時代を担う新たな人材育成のためのモデル校、といった名目で創られた高校、というのは僕も前から聞いていた。

僕の家から徒歩で通える範囲にあるし、気にはなっていたけど、結構レベルの高い学校でもある。

だから、僕が今この神龍学園の生徒になっているというのも、実は驚きだったりするのだけだ。

幼馴染みのちまきがこの学園を受けると言うので、なぜだか僕も一緒に受験することになった。

小さい頃から、ちまきのワガママに振り回されてはきたけど、このときは少々大変だった。ちまきが僕の部屋に毎日のように押しかけて、猛勉強させられたっけ。

ちまき自身は頭がいいから、余裕とまでは言わないまでも、この学園を受けるに足るレベルだった。でも僕は、まったく話にもならないほど。

そこから、ちまきのスパルタ教育が始まってしまったのだけだ。

頭はいいのに教え方が極端に下手なちまきのスパルタ教育は、正直なんの意味もなく、僕はほとんど自分ひとりの力で頑張って成績を上げていくしかなかった。

そんなわけで、合格通知が届いたときには、心の底から驚いた。

これは夢ではなからうか。そう考えてしまったのも、ごく自然なことだろう。

だから、入学式初日から大遅刻してしまったのも、ごくごく自然で当然の必然だったと言つて差し支えないはずだ。

……そんなことはないか……。

話は逸れたけど、僕の通う神龍学園は東京都国分寺市にある。

この場所が東京都の重心にあたる、ということ、ここに建てられたい。

自由な校風が特徴で、最も変わっているのは、やはり生徒会長についてだろう。

僕は知らなかったわけだけど、この学園の生徒会長は、どうやら先生方よりも偉い立場ということになるようだ。

基本的に会長ひとりでも決めていいことになっていて、先生方も会長の決定を実現するために協力する必要がある。

唯一学園長だけは、会長の決定を止める権限を持っているらしいけど。

ただ、学園長自身が放任主義的な立場にあるので、今までに会長の決定を覆した前例は数えるほどしかないのだとか。

僕は今回、会長補佐という役目を与えられたけど、これはかなりの特例らしい。

というか、ひとりでもなんでも決められて、実行するための協力は先生方がしてくれるなら、いったい僕はなにをすればいいのやら。

不安……というか不満が、湧き上がってくるところだ。

「そんな不満も、私の力でねじ伏せるわけだが」

「人の思考にまで割り込んでこないでください！」

僕は人外の能力を發揮したと思しき会長に怒鳴りつける。

「それはともかく。この学園についての説明は以上だ。わかったか？」

「とりあえず、わかりましたけど……」

やっぱり、変わってるんだな、この学園。……そして、この会長。

「私は普通だ」

「……………」

僕の心の中を完全に読み取っている時点で、普通じゃないと思うのだけだ。

もちろん口には出さないでおいた。言うまでもなく、これも読み取られているかもしれないけど。

今、僕と会長は生徒会室にいる。

そこで補佐となった僕に、会長直々にお話してくれているところだ。

……もしかしたら、洗脳されているところ、と言い換えてもいいのかもしれない、といった不安も頭をよぎっていたり……。

「……まあ、納得してくれたらと思うておこう。それでは続いて、神龍学園における生徒会長のシステムについて、もう少し細かく説明

しよつ」

会長はそう言いながら、背後にあったホワイトボードになにやら書き込んでいく。

大きな丸がふたつ。

そしてそれぞれの丸の中には、「生徒会長」「挑戦者」と文字が書き加えられた。

そしてその丸と丸の間に、さらに加えられた文字は……。

『VS』

……え〜つと……？

戸惑う僕の前で、会長は今まで書いた全体を丸で囲み、

『デュエル!!』

と大きな文字を書き殴った。

「これが、我が学園における生徒会戦拳だ」

その横に、言葉に出しながら書かれた、『生徒会戦拳』の文字。

「字が違ってる……ってわけじゃ、ないんですよ……?」
「うむ」

そう答えた会長は、生徒会戦拳の『戦』の字を丸で囲んだ。

「デュエル、すなわち戦いだからな」

会長はさらに解説を続ける。

この学園の方針として、一番強い者が生徒会長となる。そのためデュエルなのだそう。

といっても、実際に血なまぐさい戦いを繰り広げるといってもない。

これもエアコムの機能のひとつなのだけど、喧嘩や争いがあった場合、擬似空間での戦いによって決着をつけることができる。

神龍学園ではその機能を使って、生徒会長を選出……もとい、戦出する、というわけだ。

なお、この擬似空間で行われるデュエルは、周囲から観戦可能。

実際に戦うふたりは、なにもせず立っただまの状態になり、シールドに守られる。

そこから精神体が抜け出し、擬似空間内にあたかも実体が存在しているかのように、本人にも観戦している人にも見えるのだ。

もちろん、実際に己の肉体を使って戦うことにはなる。

ただし精神体だから怪我をする心配はなく、思う存分に専念できるのだという。

また、体力だけではなく、本人の様々な要素を総合した力が数値化され、デュエルで戦う精神体の能力となるらしい。

ゲーム感覚での戦いをイメージしているようで、ヒットポイントのゲージがそれぞれの精神体の頭上に表示される。

ヒットポイント以外の能力値表示はない。実際に戦ってみなければ、相手が強いのか弱いかわからないのだ。

なお、精神体は本人の姿がそのまま反映される。着ている服などもそのままだ。

デュエルは通常、学園内で行われるため、制服を着用している場合が多い。

とすると、女性の場合スカート姿になってしまっただけ。しっかりとガード機能が働くらしく、周囲の観戦者に下着を見られたりする心配はないという。

デュエルでは、痛みを感じることもない。

ただし、ヒットポイントが減る瞬間は気持ち悪く感じてしまうように、普通の人であれば一瞬動きが鈍る。

その隙を狙ってコンボを決め、一気にヒットポイントを削ることも可能なのだとか。

うーん、ほんとに、ゲームみたいだ……。

どちらかのヒットポイントがゼロになった時点でデュエルは終了。勝ち負けの結果はギャラクシー上のデータとしても残るので、ごまかしようがない。

もとは無駄な喧嘩などによる怪我や殺人なんかをなくすために開発された機能だったけど、今では様々な優劣を決める場面で使われているようだ。

「デュエルの機能で、生徒会長まで決める世の中になってるんですね」
「そうですね」

僕の言葉に、素直に頷く会長。

ところで、生徒会戦拳のデュエルは、いつ開かれるか決まっているわけではない。

挑戦したい生徒がいればいつでもデュエルの申請が可能で、申請

から一週間後にデュエルが行われ、そこで現職の生徒会長が防衛するか、挑戦者が新たな生徒会長になるかが決まる。

申請できるのは一度にひとりだけで、申請があつてからデュエル終了までは、他の人がデュエル申請することはできない。

デュエルは一對一だけど、複数人で連続デュエルなんてしていたら、現職の生徒会長が圧倒的に不利なのは明らかだからだろう。

一度デュエルで負けた人が再戦することも認められてはいるけど、その場合はさらに一週間の再申請禁止期間が設けられる。

それは、連続で同じ相手とのデュエルばかりが行われる状況を防ぐという意味合いもあるに違いない。

とはいえ、基本的にいつでも挑戦を受けなければならない立場なのは変わらない。

すべてが思いどおりになるとまで言われるくらいの権限を持つ生徒会長といえども、なかなか大変な役割なのかもしれないな。

……だったらこの人は、どうして生徒会長になったのだろう？
そんな僕の疑問は、言うまでもなく会長には読み取られていたよ
うで。

「私が生徒会長になった理由か……それはだな……」

ふっと穏やかな表情に変え、会長が静かなつぶやきを漏らす。

「もちろん、樂をしたいからだ」

「……え？」

「会長は授業もこの生徒会室で受ければいい。ノートは自動でエア
コムに記録されるし、先生の話なんて聞く必要もない。私は生徒会

長となつて自堕落な生活を送る。そのためにこの学園に入学したと言つても過言ではない」

……そんなこと、自信満々に宣言されても……。

困り顔の僕に、会長はさらなる宣言を続ける。

「私には姉がふたりいてな。両方ともこの学園で生徒会長をしていた。一番上の姉など、入学してすぐにデュエルで勝ち、そのまま卒業まで生徒会長を続けた最長在位記録を樹立したのだぞ?」

「それは……すごいと思いますけど……。でも理由は、楽をしたかったから、なんですよね?」

「無論だ」

迷いなく即答。

「そんなわけで、除夜、お前には私の補佐として頑張ってもらつ。私が楽をするために!」

「……………拒否権は……………?」

「ない」

もちろん即答。

僕に、逃げるといふ選択肢は、どうやら用意されていないようだった。

「ところで……」

僕は最初にこの生徒会室へと連れ込まれてからずっと気になっていたことを、ようやくここで口にする。

「会長、この生徒会室、マジですか？」

「ん？ ……ああ、そうか。確かにちょっと手狭だとは思うが……」

「いや、そういうことじゃなくて！」

大きく手を広げ、手狭な生徒会室全体を示す仕草をしながら、僕は叫ぶ。

「どうしてこんなに、汚いんですか、ここは！？」

生徒会の仕事に使うような資料でごちゃごちゃになっている、というのなら、まだマシだっただろう。

だけど、今僕の周りに広がる生徒会室の光景は、そういったものとはまったく異質なオーラを放っていた。

ちょっと狭い生徒会室のそこら中に、会長の私物と思われるバッグやらアクセサリーやらが転がっている。

そういったものを学園に持ち込むこと自体が、問題になりそうな気もするけど、僕が気にしているのはそこではない。

散乱している中には、会長の衣類なども紛れていたのだ。

体操着や靴下といったものだけではなく、下着までもが無造作に脱ぎ捨てられている状態で……。

「ふむ。そうだな。今までは私ひとりの部屋だったから気にしていなかったが、これからはお前も一緒に住むわけだから、気にしなければならぬか」

「一緒になんて住みません！ だいたい会長だって、ここに住んでるわけじゃないでしょう!？」

「まあ、確かにそうだが。しかし、トイレもシャワーも完備されているからな、ここは。たまに泊まり込むことはあるぞ?」

「そう……なんですか……」

生徒会長という立場、しかもすべてをひとりでこなす必要がある立場だから、忙しくて帰れない、なんてこともあるのか……。

僕は、頭ごなしに怒鳴りつけたのを少々反省し始めていたのだけだ。

「ここでだらだら生活していると、帰るのも面倒になることが多いからな」

「あなたはダメ人間だ!」

どうしてこんな人が生徒会長をやっているのか……。

それもひとえに、この学園のシステムの成せる業ということか……。

「失敬な。それでも私には人望があるのだぞ?」

「人望のある人の生活する場とは思えません……」

僕は視線を脱ぎ捨てられた衣類へと向ける。

あの黒いヒモみたいなのって……。会長、神聖な学園内ですわいどんな下着を身につけてるんですか!

考えをまたしても読んだのか、僕の視線を追った会長がこんなこ

とをのたまう。

「ふむ。興味があるか。欲しいなら持って帰っても……」

「そんなこと思ってませんし、持って帰ったりもしません！」

「ふっ、つまらない男だな」

「なんですか、それは！」

どうやら会長は、僕をからかっているだけだったようで、おもむろに脱ぎ捨てられた自分の衣服を拾い集め始めた。

さすがに会長でも、男である僕に、脱いだあとのものとはいえず着まで見られてしまうのは恥ずかしいという思いがあったのだろう。

……そんな僕の考えは、どうやら完全に間違っていたようだ。

会長は、拾い集めた衣服の塊を持ったまま僕の目の前にまで歩み寄り、そして、

「では、よろしく頼む」

と言いながら、それらすべてを僕に押しつけてきた。

反射的に腕を伸ばし、下着も含む会長の衣服を抱える僕。

「って、会長！ よろしく頼むって、なんですか！？」

「洗濯を頼むと言ってているのだ。隣の家庭科室に洗濯機があるから、使わせてもらおうといい。家庭部の女子生徒がいるかもしれないが、生徒会長の命令と言えば問題ないはずだ」

「……………これって補佐の仕事なんですか？」

「無論だ」

断言された。

僕はしぶしぶ隣の家庭科室へと赴き、家庭部の女子生徒に白い目

とひそひそ声を向けられる中、会長の衣服（下着含む）の洗濯を黙々とこなすのだった。

洗濯のあと、僕は部屋の掃除や会長の私物の整理までさせられた。……私物の管理くらい自分でやってほしいところだけど、僕に拒否権はないらしい。

会長の洗濯物は、生徒会室の天井付近にロープを張り、部屋干ししている。

狭い部屋なのに、いたるところから洗濯物がぶら下がっているのは、かなり狭さを助長させる結果となっているのだけど。

それ以前に、下着も含めて干してあるから、僕としては目のやり場にも困ってしまう。

ともかく、そうやって掃除なども終わり一段落した僕は、パイプ椅子に座り、会長と一緒にコーヒーをすすっていた。

この生徒会室には、湯沸しポットも用意されている。

コーヒー、紅茶、日本茶が取り揃えられており、お菓子類も用意されている上、冷蔵庫まで完備されている。

どう考えても経費の無駄使いだと思うのだけど……。

ただ、コンロは見当たらない。火事になったら困るとい理由からだろうか。

どちらかというと、隣が家庭科室だから必要ない、という理由のほうが大きいような気はするけど。

食器類も、使い終わったら僕が隣の家庭科室で洗うのだろうか。

……だろうか、というか、おそらくそうなんだろうか。

まずまず。

大きな音を立てながら、あまり上品ではない飲み方をしている先輩はブラックコーヒー、僕はカフェオレをいただいている。

会長から労いの言葉はない。僕が補佐として仕事をするのは当たり前だと思われているのだろう。

「お前の髪はサラサラだな」

コーヒーを飲んで落ち着いたからか、会長が不意にそんな話を振ってきた。

こんな普通の会話をするのは、初めてではなからうか。

「……ええ、よく言われます」

確かに髪の毛はちよつと自慢だった。

綺麗な黒髪、というのはよく言われることだ。ちまきには、小さい頃からよく羨ましがられている。

羨ましい〜と言いながら、髪の毛を引っ張りまくるのは、やめてもらいたいところだけだ。

「射干玉というのはそういう髪のことを言っただったか。だからそんな名字なんだな」

「……いや、偶然だと思いますけどね……」

だけど、会長から髪の毛の話題が出てくるとは思わなかった。

やっぱり会長でも、一応は女性なんだな。なんて考えたら、それだけで心を読まれて死刑ものだろうか。

「で……でも、髪の毛だったら、会長も綺麗ですよね」

とりあえず、睨まれているような感じを受けたので、僕のほうか

ら会長を褒める話題に切り替えていく。

「ん？ ああ、そうか？ まあ、あまり手入れなどしてないのだから」

そう言いながらも、まんざらでもなさそうな表情を見せる会長。

「サイドテールにまとめてますけど、ゴムを解いたらかなり長そうですね。髪を洗うのも大変じゃないですか？」

「そうなのだ。水分を吸うと余計に重くなるからな、重さで首が折れてしまいそうなのだ！」

……そんなヤワな首でもないでしょうに。とは、もちろん言葉にしない。

心を読まれるかとは思ったものの、今なら気分もよさそうだから、きつと大丈夫だろうと、高をくくっていたのだけだ。

「……それにな、水を吸った髪を振り回せば、強力な武器にもなるのだ」

そう言いながらも、会長のこめかみはピクピクと動いているようだった。

そしてさらにトドメの一言。

「あゝ、それは会長らしいですね」

僕は思わず口にしてしまった。

「……待ってる。今からお前で試してやる」

「わ……わあゝ！ 冗談ですってば、会長……」

おもむろにシャワー室へ向かおうとする会長を、僕は必死になつて止めるのだった。

「そつえば会長、さっきお姉さんの話を聞きましたけど」

再びパイプ椅子に腰を落ち着け、今度は紅茶をすすりながら、僕はまだ若干不機嫌そつな会長に話しかける。

「……ああ、そつだな。それがどうかしたか？」

どうやら、若干ではなく、かなり不機嫌そつだ。

「いえ、あの、上のお姉さんは卒業まで生徒会長だったと聞きましたけど、その場合、次の生徒会長はどうなるんですか？」

「そのときは、卒業する生徒会長が指名する形になるな」

まだ不機嫌さは消えていないながらも、会長はしつかりと答えてくれた。

「上の姉は卒業の際にも伝説を残している。次期生徒会長に、一番ひよろい見た目の気弱な男子生徒を指名したのだ。頑張つて強くなれ、と言つてな」

「……その人と、面識はあつたんですか？」

「いや、ひと目見て、面白いことになる……いや、この学園の未来のためになると感じたそつだ」

「……………そうですか」

「ま、もつとも、新学期早々すぐにデュエルで負け、その生徒会長は最短在位記録を更新して伝説となったようだが」

「絶対、嫌がらせですよね……………」

会長のお姉さんも、どうやらかなりひどい人のようだ。

この人のお姉さんなら、当然といえば当然なのかもしれないけど。

「だが、悪い姉ではないぞ。上の姉も下の姉も、私は尊敬している」

……………この会長の口から尊敬という言葉が出てくるなんて、正直僕は驚いた。

「もつとも、一番年下だった私は、昔からあんなことやこんなことをされ続けてきた。兄弟姉妹なんてものは所詮上下関係だからな。

だからこそ、私はそんな姉たちに負けないような、いや、姉たちを追い越すような生徒会長となることを望んでいるのだ」

「……………それは……………お姉さんにいじめられた仕返しを、ここの生徒に対してする、という極悪非道宣言とも取れるのですが……………」

「ぶっ……………さて、どうかな？」

ニヤリと笑みをこぼす会長。

「いやいや、否定してください！」

「はっはっは、冗談だ」

ほんとに冗談なのか、いまいちよくわからない。

だけど、会長の機嫌はよくなったみたいだから、とりあえずよかったとおもう。

それにしても、生徒会長補佐なんて大変かな〜とも思ったけど、こうやって会長の話し相手になってればいいだけなのかな。

だとしたら、会長は楽をしたいだけっぽい感じだし、僕自身も結構楽できるかも。

そんなふうに考えていたのだけど。

それが甘い考えだったと僕が思い知ったのは、そのすぐ翌日のことだった。

生徒会長は、デュエルで決まる。

生徒会長を続けるには、防衛戦で勝ち続ける必要があるのだ。

……って、ええっ!?

僕が会長の代わりに、デュエルで戦うんですか!?

次回、第三話、デュエルは補佐の大仕事?

……そんな役目、聞いてないですっつてば!

朝。

ちらほらと同じ制服を着た生徒たちの背中が見える通学路を、僕とちまきは肩を並べて歩いていった。

幼馴染みで家が隣同士の僕たちは、小学生の頃からずっと、朝はこうして一緒に登校している。

幼稚園はバスだったから歩いて登園する必要はなかったけど、もちろん一緒の幼稚園だったから同じバスに乗って通っていた。

普通は中学生ともなると、男女で一緒にいることを恥ずかしく思ったり、周りから冷やかされたりとかして、若干距離を置くものかもしれない。

でもちまきは、周りから囁し立てられるのなんてお構いなしに、僕と一緒にいることが多かった。

高校生となった初日、神龍学園の入学式だった昨日は、僕が寝坊して遅刻したせいで、一緒に登校しなかったわけだけど。

僕の部屋にまで勝手に（きつとお母さんの承諾は得ていたと思うけど）上がってきて、ちまきが起こしてくれたのは覚えてる。

だけど僕は、すぐに追いつくから先に行つて、と寝ぼけながらも伝え、そのまま二度寝してしまったのだ。

結果、ひとりで遅刻して登校、生徒会長と運命の出会いをするこ
とになった。

昨日は生徒会室に連れ込まれ、遅くまで会長の話し相手なんてしていたため、家に帰ったのも暗くなつたあとで、ちまきと一緒に下校することもできなかった。

どうやらずっと校門の前で待っていてくれたみたいなのだけど。

エアコムには電話やメールの機能もあるけど、会長に言われてマナーモードにしていたのをすっかり忘れていた僕は、ちまきからの電話にもメールにも、まったく気がつかなかった。

朝になって着信があることに気づき、メールの返信をしようとしたところで、僕の部屋にちまきが飛び込んできた。

「今日は起きてたのね」(ちっ)

おはよつの前に、そんな言葉がちまきの口からこぼれた。

その舌打ちは、いったい……。

そうは思ったけど、追求しないことにした。

まだパジャマ姿だった僕は、ちまきに玄関で待つてもらい、すぐに支度をして、今日はこうして余裕のある時間に通学路を歩いているところだった。

「それで除夜ちゃん、本当に生徒会長の補佐として、ずっと生徒会室で授業を受けるわけ？」

「うん、どうやらそうなるみたい」

「強制だったんでしょ？ そんなの、断っちゃえばいいんじゃない？」

「だけど、神龍学園では、会長は絶対的な存在なんでしょ？」

「それはそうだけど……でも、一個人の人権を無視したような身勝手は許されないんじゃない？ っていうか、あたしが許さないし」

「ちまきが許さないのは、あまり関係ないんじゃない……。それに、人権って、そこまでの話じゃないでしょ」

「そこまでの話よ！ なんでせつかく一緒のクラスになったのに、一緒に勉強できないのよ！ あたしのハッピースクールライフ計画

が台無しよ!」

「なにさ、それ」

思わず苦笑が浮かぶ。

ちまきが本当に怒ってくれているのはわかったけど、僕自身は、さほど嫌だとも思っていないのだから。

「補佐つていっても、会長の話し相手になればいいみたいな感じだし、結構気楽なもんだよ? だから心配しなくていいよ」

「心配じゃなくて!」

安心してもらおうと僕は本心を語ったのだけど、どうやらちまきは心配しているというわけではないらしい。

はて? だとすると、どういうことだろう?

「心配じゃなくて、なに……?」

「えっと、だから、それは、その……」

なにやらちまきは、顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

左右に分けている前髪から、なぜかひと房だけアゴの辺りに届くくらいまで伸ばしている前髪の先端を、無意識のうちにくわえながら、もごもごと言葉にもなっていないつぶやきをこぼす。

髪の毛の先端をくわえるのは、ちまきの昔からの癖だ。

幼い頃、ちまきのお母さんが「汚いからやめなさい!」と叱っているのをよく見かけたけど、高校生になった今でも、この癖は直っていないようだ。

と、うつむきながら歩くちまきが、なにやら必要以上に僕に寄り添ってくる。

もともとかなり近い距離で並んで歩いてたわけだけど、ちょっと歩きにくいくらいにくつつかれると、春の暖かな日差しの中だから少々暑苦しく感じるほど。

そんな文句を言ったら、殴られそうだけど。

「おい、お前！ 除夜から離れる！」

不意に凜とした声が響く。それは、生徒会長である華神桜蘭先輩だった。

「あつ、会長、おはようございます」

「って、なに普通に挨拶してんのよ！ 会長さん、離れるって、どういうことですか！」

僕とは対照的に、敵意むき出しのちまきが、僕に腕を絡めながら会長に向かって怒鳴り散らす。

「言葉どおりの意味だが。除夜は私の補佐だ。ゆえに除夜は私のものだ。昨日も言ったはずだぞ？」

対する会長のほうは、慌てた様子もなく冷静に言葉を返してきた。

「ふざけないでください！ 除夜ちゃんは、あたしのもんです！」

幼馴染みの特権なんですから！」

……いやいや、ちまきのほうにこそ、ふざけないで言いたい。いつ僕がちまきのものになったというのやら。

そんな思いを僕が口にする隙もないほど、ふたりの言い争いは矢継ぎ早に続いていた。

「ふざけてなどいない。生徒会長の特権だ。これは学園の規則でもある。生徒であるお前には、従う義務がある！」

「そんな横暴です！ 除夜ちゃんの人権を無視するなんて、許されるはずないです！」

……だつたらちまきにも、僕の人権を尊重してほしい。

「除夜も補佐の役目を喜んで引き受けてくれたのだぞ？ 横暴などと言われる筋合いはないと思うが」

……べつに僕は喜んで引き受けた覚えなんてないですが……。

「会長さんがマインドコントロールでもしたんでしょう！？ あっ、それとも、色仕掛けですか！？ 卑怯ですよ！？」

……なにやら、話があらぬ方向へ進んでいるような気も……。

「色仕掛けなどしていないが。しかし、そうだな……。お前のその残念な胸では、色仕掛けもできなさそうだ……。すまない……」

「な……！？ 気にしてるのに……！ それに、そんなことで謝らないでください！ こっちが惨めです！」

「それならば、勝ち誇ってやろう。ほくら、でかいだろう？ 羨ましかろう？ ほっほっほ、悔しかったらお前もこれくらいになつてみる！」

「うが……！ それはもっとムカツク……！ ウキ……ッ！」

「猿かお前は。まったく、うるさいヤツだな。近所迷惑だぞ？」

「誰のせいですか！ あなたにだけは、言われたくないです！ この職権乱用女！」

「ふむ。だつたらさらに乱用させてもらおう。お前、ここで脱げ！」

「は……はあ！？ なにバカなこと言ってますか！？ だいたい

そんな特権、生徒会長にあるんですか!？」

「いや、ないな。もしあったら、男子が生徒会長になった場合、大変なことになる」

「そ……それはそうですね」

安堵の息を吐く、ちまき。

でも、もし会長にそんな特権があったとしたら、本当に脱ぐつもりだったのだろうか。

「ともかく、除夜は私の補佐だ。今日も生徒会の仕事がある。だから連れていくぞ」

ぐいつ。僕の右腕を引つ張る会長。

「だ……ダメです!」

ぐいつ。僕の左腕を引つ張るちまき。

「しかし、除夜には生徒会室に行く義務がある」

ぐいつ。

「あたしの除夜ちゃんなんですから! 一緒に教室に行つて一緒に勉強するんです!」

ぐいつ。

「いや、私とともに来てもらう!」

ぐいつ。

「あたしと一緒に行くんです!」

ぐいぐいぐい。

……………。

「痛いってばっ!」

バツ! ふたりの腕を振り解く。

突然の爆発に、会長もちまきも目を丸くしていたけど。

「とりあえず、会長の補佐になったのは確かだから、僕は生徒会室に行くよ。ごめんね、ちまき」

僕の言葉に、会長が勝ち誇ったような笑顔を見せる。

「そうだろうそうだろう! さあ、行くぞ!」

「……………でも、僕は会長のものではないですからね」

念のため釘は刺しておく。ここで調子に乗られたらたまらないし。と、ちまきが大声で追いつがってくる。

「だ……………だったら! あたしも、会長の補佐になります!」

「それはダメだ」

ピシヤリと言い放つ会長。

「私が認めないし、だいたい、除夜ひとりだけでも特例なのだからな。これ以上は無理というものだ」

「あの……………だったら僕も、べつになりたくてなったわけでもないし、

可能なら補佐を辞めたいんですけど……」

控えめに申し出る僕を、会長は鋭い目で睨みつける。

「それはダメだ。私が許さないと云っているだろう？ 逆らったら、
そうだな……知り合いの死神にでも頼んで消してもらおうからな」

そんなバカこと、あるわけないじゃないですか！

とは思ったものの、ふと会長の背後になにか得体の知れない気配を感じて、視線を向けてみた僕。

少し離れた辺り　あの曲がり角か電信柱の辺りだろうか、ほんの一瞬ではあったけど、なにやら黒い影がチラリと見えたような気が……。

も……もしかしたら、知り合いの死神ってのが、本当にいるのかも……？

怖くなった僕は、それ以上にも言えなくなってしまった。

それはちまきも同じだったらしく、会長に黙って引きずられていく僕の姿を、名残惜しそうな視線は残しながらも、やっぱり黙ったまま見送ることしかできないようだった。

「さて、今日の予定だが」

生徒会室に着くなり、会長が話し始めた。

「昨日も話した生徒会戦拳のデュエルがある」
「あつ、そうなんですか」

デュエルで戦い、勝たないと、生徒会長は交代させられてしまっ
んだったよね。

「大変ですね。頑張ってください」

僕としては、補佐の役目から解放されるだろうし、負けてくれた
ほうがいいのかも、なんて思いもあったのだけど。

とりあえず機嫌をそこねないよう、応援の言葉を口にしておく。
でも……。

「なにを言っている。頑張るのは除夜、お前だぞ？」
「……はい？」

思わず疑問符が浮かぶのも、当然の反応というものだろう。
だけど会長は、僕に向かってはつきりきっぱり、こう言いきった。

「除夜がデュエルで戦うのだ。私の代理として」
「……………えええええっ!？」

驚きの声を上げ、混乱困惑驚愕呆然、様々な思いが頭の中で渦巻

く僕を尻目に、会長は淡々と今日のデュエルについて語り続ける。

「春休み前の申請で一週間後が春休み中だったため、今日になってしまったのだが。こうして補佐も決まり、代理を立てることができて、私としてはちょうどよかったな」

「僕は、よくないです！ 聞いてないですってば！ だいたいそんな重要なデュエルに、代理なんて立てていいんですか!？」

「ああ、代理デュエルも認められている」

必死の抵抗を試みるも、あっさり撃沈。

「もちろん、負けたら私が生徒会長から降ろされてしまっからな。除夜には死に物狂いで頑張ってもらわねばならない」

「ちょ……ちょっと待ってください！ それって、重要すぎる役目なんじゃ……!？」

「まあ、そうだな。私の未来はすべて、お前の戦いぶりにかかっていると云ってもいいだろう。任せたぞ」

そこまで信頼されている、と考えれば、悪い気はしないとも言えるのだけど。

それにしても、昨日初めて会ったばかりの僕に、どうしてそこまで委ねてしまえるのか……。

「大丈夫だ。お前なら、やれる」

「で……でも……」

負けてしまえば、補佐の役目から解放される。

だから僕がわざと負ける、というのは考えていないのだろうか？

デュエルはあくまで擬似戦闘。どんなに強く殴られ蹴り飛ばされ

て無残に負けようとも、僕自身に怪我や痛みはない。

だったらこれは、チャンスなのでは……？

わざと負けてしまえば、補佐からも解放されて、ごく普通の高校生活を送ることができるのでは……？

だけど……。

「すべて、お前に任せたからな。よろしく頼むぞ」

そう言いながら真摯な瞳を向ける会長を、僕は裏切ることができないのだろうか……？

僕が負けたら、この人は生徒会長ではなくなる。

単なるだらけきった、ワガママなひとりの女子生徒になってしまっただろう。

そんなこと、僕に耐えられるだろうか……？

……べつに構わないか。自業自得だし。

この人が生徒会長をやっているのは、楽をしたいからだと自ら言っていた。

他の人が生徒会長になったほうが、学園のためにもなるかもしれない。

僕の考えは、やっぱり会長にはお見通しのようで。

「言うておくが、わざと負けた場合、お前自身の経歴にも泥が塗られることになるぞ？ 生徒会戦拳デュエルにて代理として戦い、負けたという結果は、ギャラクシー上の個人情報に常時公開データとして永久に残されてしまうからな」

「う……」

普通の個人情報データとして残るなら、参照不可能な公開レベル設定にすればいいだけだ。

でも、常時公開データとなると、そうもいかない。

代理でデュエルに出て負けたくらいだったら、さほど大きなマイナス要素にはならないとも思うけど、それでも重要なデュエルにおいて負けてしまった人間だと不特定多数の人に知られてしまうのは、あまり気分のいいものではない。

「やっぱり、責任重大すぎますよ……。僕じゃなくて、会長本人が出たほうが……」

「大丈夫だ」

完全に弱気に支配されていた僕に、そう断言した会長の声は、すぐ目と鼻の先から聞こえ、そして。
ちゅっ。

軽い音を響かせて、会長の唇が、一瞬だけ僕の額に触れ、そして離れた。

「……え？」

「これで私の力がお前に宿った。いわば、お前は私の分身となったと言える。だから、大丈夫だ」

「会長……」

額が、熱い。

これは、会長の力が宿った証拠なのだろうか？

「除夜、やれるな？」

「……はい」

吐息すらも感じられる、ごく至近距離からの問いかけに、僕は素直に頷き返していた。

エアコムの機能を使い、僕は昨日会長から言われていたとおり、授業を生徒会室で受けた。

そして放課後。

デュエルの会場となる校庭へと、僕は連れ出された。

会長の代理としてデュエルに出るというのに、どうやら会長自身もその場に向かうらしい。

だったら自分で出ればいいのに、と思わなくもない。

校庭には多くの生徒が集まっていた。

デュエルは擬似空間内で行われ、そこで精神体となったふたりが戦うわけだけど、周りで観戦することも可能となっている。

擬似空間自体は、どんな狭い場所でも展開させることが可能なものの、大勢の観衆がいるとなると、狭い場所で行うわけにもいかない。

そんなわけで、大抵の場合、校庭や体育館が使用されるのだという。

「……それにしたって、バカ騒ぎしすぎじゃないですかねえ？」

「そうか？ 毎度こんなもんだぞ？」

僕は驚いていたけど、会長の様子はとくに変わらない。

だけど、僕が驚くのも無理はないと思う。

なにせ会場となる校庭には、全校生徒と言ってもいいくらい大人数の生徒たちが集まっていたのだから。

『お~~~~つと！　ここで生徒会長の華神桜蘭が、補佐となった射干玉除夜を伴って登場だ~~~~！』

わあああああ~~~~！

マイクを通した声に煽られるかのように、怒涛のような歓声が沸き起こる。

「……なんか、実況までされてるみたいですけど」

「ああ。それも毎度のことだ。放送部の連中にとっては、最高の晴れ舞台らしいからな」

まさしくお祭り騒ぎ。

実際、簡易屋台まで出して、ちょっとしたお菓子や飲み物なんかを売っている人まで見受けられる。

あれって問題にならないのだろうか……。

「お。見えてきたぞ。あれが対戦相手だ」

「……………ゲツ!？」

思わず自分らしくない声を上げてしまった僕。

それほど、その対戦相手は、度肝を抜いていたわけで。

「総合格闘技部部長の三年生、はがねのきょたい鋼野巨体だ」

「本名ですか、それ!？」

「私を知るか」

ともかく、名は体を表すという言葉が示すとおり、その対戦相手は、鋼のような体を持った、とんでもない大男だった。

『レディースアンドジェントルメーデー！ お待たせしました
~~~~！ 今年度初の生徒会戦拳デュエル！ 生徒会長代理、射干  
玉あゝ除夜あゝ~~~~！ ヴァアアーサーサーズ！ 総  
合格闘技部部长、鋼野おおゝ巨体いい~~~~！』

うおおおおおおお~~~~ん！！

大音量の歓声が響き渡る。

戦闘の舞台となる円形の闘技場のような擬似空間に立っている僕。  
目の前には、対戦相手の大男。

精神体となっているから、正確にはお互いに見えている姿は本物  
ではないわけだけど。

でも、実際に目の前に立っているかのように、威圧感を受ける。  
それは精神的に追い込まれていることの表れなのだろうか。

周囲には多くの生徒たちの姿が見える。

会長は腕を組み、パイプ椅子に座って試合を観戦する構え。

他には、ちまきの姿も見つけることができた。

必死になって「除夜ちゃん、頑張れ〜！」と声援を送ってくれて  
いる。

生徒会長の補佐として代理で戦う立場というのはわかっているだ  
ろう。それ自体はきつと、納得できていないに違いない。

でも、ちまきは無条件で僕の味方だ。

会長が会長のままでいられるように、ということとは関係なく、  
純粹に僕自身を応援してくれているのだ。

相手は三年生だから先輩ではあるけど、デュエルに遠慮はいらない。

会長からもそう言われている。

僕だって、負けるつもりはない。

負ければ補佐の役目から解放される。それはそれでいいのかもしれないけど。

でも、僕だって負けたくない！

……というか、こんな大男に負けたら、とんでもないことになりそうだし……。

精神体になっているから怪我の心配はないとはいえ、精神すらもスタボロにされそうな気がする……。

『レディ~~~~、ゴオオオオ~~~~!!』

カア~~~~ン！

そんな中、実況の放送部員の声に合わせて、デュエル開始のゴングが鳴り響く。

途端、目の前に迫る巨体。

うあっ！ これは凄まじい迫力！

開始早々、気合い負けしている僕。

しかも、短パン一丁で上半身裸のムキムキ大男が、両腕を広げ抱き上げる……いや、締め上げる構え。

僕は血の気が引いた。

あの太い腕につかまったら、僕なんて一瞬で背骨が折られてしま  
う。

もちろん精神体だからそんな心配はないのだけど、つつい怪我  
や痛みを想像して気後れしてしまうのだ。

それだけ、あの巨体から受ける威圧感は強大だった。

「除夜ちゃん〜！ 頑張つて〜！」

ちまきの声援が聞こえる。

頑張つてと言われても、こんな巨大な筋肉男相手に、スポーツと  
は無縁な僕に、どう戦えと言つのやら……。

相手の腕をすんでのところかわし続けるのが精いっぱい。

反撃に転じるような余裕なんて、僕にはなかった。

一方的な試合。

最初こそ大声を上げて実況していた放送部員だったけど、途中か  
らは実況する気力すら失ってしまっているようだ。

見ている観衆としても、つまらないだろう。べつに僕は、観衆を  
楽しませるためにここにいるわけじゃないけど。

でも……。これは、勝てない……。

動きも体格も、すべてが違いすぎる。巨大なアフリカ象に無謀に  
も蹴りを入れようとするとする跳びネズミのようなものだ。

人間、諦めが肝心なのかもしれない。

そんな思いすら浮かんできた、そのとき。

会長と、目が合った。

「信じているぞ」

言葉にこそしなかったものの、会長の瞳は、そう語っているように感じられた。

額が、なんだか妙に熱い。

そうだ。

僕はさっき、額にキスを受けて、会長の力を宿してもらったじゃないか。

今の僕には、会長の手も加わっているということだ。

デュエルでは、本人の様々な能力が数値化され、精神体の強さに反映されるという。

その能力に会長の能力が加算されたら、それこそ百人力だ！

ああ見えて成績は学年トップクラスだというし、サボリ癖はあるものの運動能力も高いと聞く。

僕自身が並以下の人間だとしても、会長の力を得た今の僕なら勝てないはずがない！

なんだか心の奥底から自信が熱となってどんどん湧き上がってくるようだ。

額からは、あまりの熱量のせいかな、煙まで立ち昇り始めている。

「僕は……」

「むっ……？」

今までほぼ無抵抗だった僕がいきなり睨みつけたことに、一瞬たじろいだのだろう、相手の動きがピタリと止まる。

「僕は、勝つ！」

気合い一閃！

熱くなった額が、真っ先に動いていた。

そのまま僕は、巨体のみぞおち辺りに頭突きを食らわす。

「う……ぐ……熱っ!？」

あまりの勢いに思わず身を引いてしまったのだろう、相手の巨体は僕に押されるように舞台の端っこまでふらふらと下がっていく。

そしてまるで吸い込まれるかのように円形闘技場を取り囲む壁へと倒れ、自らの重みも手伝って思いっきり壁面にめり込むという結末を迎えた。

『しょ……勝者、生徒会長代理、射干玉除夜！ 今回の生徒会戦拳デュエルは、現生徒会長の防衛成功という結果になりました！』

思い出したかのように、放送部員が実況で結果報告をすると、静まり返っていた会場に一気に歓声が轟く。

その瞬間、擬似空間が消え、僕の精神はもとの僕の体に戻った。

「除夜、よくやったな」

真っ先に駆けつけ労いの言葉をかけてくれたのは会長だった。けれど僕は首を横に振る。

「いえ……会長のおかげです」

自分の力ではない。

会長の与えてくれた力のおかげで勝てた。

だから、僕には労いの言葉を受ける資格なんてないと考えたのだ。

「ん？ 私はなにもしていないぞ？」

「キスしてくれたじゃないですか」

「キ……キスう〜!？」

僕の言葉に驚きの声を割り込ませてきたのは、会長に続いて駆け寄ってきていたちまきだった。

「ちょっと除夜ちゃん、どういうことよ!？」

「どづいうことって、言葉どおり……」

「か……会長さんと、キスしたのっ!？」

なんでそんなに目を血走らせて、怒鳴りつけるように声を荒げているのだろっ、ちまきは。

「うん、まあ。僕の額に……」

「あ……なんだ。額、なのね……」

ちまきは、なぜだかほっと安堵の息をつく。

「ああ、なるほど。あの額のキスのことを言っていたのか」

「ええ。そのおかげで会長の力が僕に宿って、それであんな大男の先輩にも勝てたんですね?」

「いや、違っぞ。あんなの、単なる嘘に決まっているじゃないか」「え?」

「口からでまかせ、そう言ったままで。私はあんな脂ぎったデブなんかと戦いたくなかったからな。いくら精神体でニオイなども感じないとはいえ、目の前にあの巨体があるというだけで嫌気が差すだろっ?」

「そんな理由で僕に戦わせるなんて! 勝ったからいいようなものの、負けてたらどうする気だったんですか!？」

「まあ、負けたら負けたでべつにいいだろう。世の中、なるようにしかならないからな」

なんだか、ちょっとカッコいい、と思ってしまった自分は、少々感覚がズれているのだろうか。

と、会長が突然僕をぎゅっと抱きしめる。

「つまり、私とお前は一心同体ということだ」

「会長……」

「ちょ……！？ なにやってんのよ、ふたりとも！ 離れなさい！」

ちまきが僕と会長を引き剥がそうと躍起になるけど、会長は面白がってさらに強くひっついてくる。

「もう！ さっきみたいに、また燃やすよ!？」

どうやら勝てないと悟ったのか、一旦距離を取り、ちまきは両手でなにかを握って目の前にかざした。

「また燃やす……って、どういう……ああっ!？」

ちまきが目の前にかざしているのは、虫眼鏡だった。

その虫眼鏡に、地平線近くまで下がってきている太陽の光を集め、僕の額へと向けている。

「熱ちちちちちっ！ やめてよ、ちまき！」

そして僕の額からは、さっきと同じように煙が上がる。

さっきと違うのは、精神体ではなく実体だから、その熱さが尋常じゃないということだけ。

つまり、デュエル中に感じた額の熱さは、僕に宿った会長の力ではなく、ちまきのイタズラだったということだ……。

「そんな危険なこと、しちやダメだつてば!」

「されたくなかったら、会長さんから離れなさい!」

「そんなこと言ったって……」

「ふっふっふ、除夜は私のものだからな。離したりはしない」

「だったら、今度は会長さんのほうに光を……」

「それはもっとダメだつてば!」

「あ~~~~！ 除夜ちゃん、こんな女の肩を持つっていつの!？」  
「お前、先輩に向かつて、こんな女呼ばわりか？」  
「む、なんでこんなことになってるんだ……」

このときになって、僕はようやく気づいた。

周りにはデュエルを観戦していた、ほぼ全校生徒と言っているほどの人たちが集まっていたということに。

『おお~~~~っ！ これは面白いことになっております！ 射干玉除夜を巡って、生徒会長ともうひとりの女子生徒 ふむふむ、一年生の柏葉ちまきという名前の生徒ですが、彼女との三角関係愛憎劇が繰り広げられている模様です!』

おおおおお~~~~~~~~!

放送部員の実況に合わせて、デュエルのときよりも大きな歓声が沸き起こる。

『ここから先も、完全実況生中継でお送りさせていただきますと思います!』

「やめてくださいっ!」

僕は会長とちまきのそばからどうにか離れ、意気揚々と実況を続ける放送部員にツッコミを入れたのだった。

春といえば桜！ 桜といえばお花見！

その思考回路は、オッサン化してませんか？

……痛たたたつ、殴らないでください、会長！

次回、第四話、全校お花見大会！

え？ 会長……？ ちょ、ちょっとなにをしてるんですか！？

う、うわぁ〜っ！

「春ですね」

「春だな」

生徒会室の窓から見える景色は、どこもかしこも桜だらけ。舞い散る桜色の花びらたちが、視界を温かく染め上げる。

こうやってエアコムのウィンドウに映し出される先生の話をただぼーっと眺めるだけの授業にも、だいぶ慣れてきた気がする。

でも今ごろ、教室ではちまきを含めたクラスメイトは机を並べて、直接先生の声聞いて授業を受けているのだろう。

僕の状況は、気楽でいいものの、ちょっと寂しくもある。

クラスメイトのみんなって、僕がいなくても関係ないのかな？

……入学初日からこんな生活だし、僕の顔も名前も覚えていない人だって多そうだけど……。

だいたい高校生活っていうのは、交友関係を広げる場でもあるはずなのに、こんなふうに生徒会室に引きこもる日々なんて……。

でもそう考えたら、会長だって同じことなんだよね。

いつから生徒会長をやっているのかは聞いてないけど、僕が補佐になるまでは、ずっとこの生徒会室でひとりぼっちだったということになるわけだし……。

会長……もしかして、ひとりで寂しかったから僕を補佐にしたのかな……？

「ん？ 除夜、どうした？」

「あ……いえ、なんでもありません」

つい会長を見つめてしまい、僕は慌てて視線を逸らす。逸らした視線の先には、桜の花びら。ゆらゆら舞い踊る花びらは、なんとなく切なさを助長させるような気がする。

「桜が綺麗だな」

「はい、そうですね」

「よし……。春といえば桜、桜といえばお花見！ というわけで全校花見大会を開くぞ！」

「え……？ 全校つて、そんなこと勝手に決めていいんですか！？」

「いいのだ。私は生徒会長だからな」

……そうだった、ここはそういう学校だった。

「善は急げだ。早急に先生方への報告と全校生徒への告知をせねばならないな。これは忙しくなるぞ！」

なんだかノリノリの会長。

でもまあ、僕としても悪い気はしない。

そういったお祭り騒ぎイベントも、古臭い言い方にはなるけど高校生活を彩る青春のページ。準備の段階では大変かもしれないけど、当日は生徒会長補佐という身でも思う存分楽しむことはできるだろう。

素早く先生方への報告をし、簡単な役割分担を決めたあと、僕と会長は生徒会室へと戻ってきた。

思いつきで開催を決めた全校お花見大会のはずなのに、会長はしつかりと頭の中で計画を組み上げていったようで、準備として必要なことや当日のスケジュールなどを説明し、てきぱきと先生方に指示を出していた。

楽をしたいから生徒会長をしている、なんて言っていたけど、やるときはやる人なんだと思い知らされた。

思わず会長に尊敬の眼差しを向ける。

と、そんな僕に、会長はこんな命令を下した。

「よし、あとはお前の役目だ。全校生徒に告知するためのポスターを大急ぎで作ってくれ」

「僕が、ですか？」

「そうだ」

「言い直します。僕だけが、ですか」

「そうだ」

「……………」

「中央掲示板に大きなポスターを一枚、教室棟の各階に一枚ずつは最低限必要だが、それ以外にもある程度の範囲ごとに一枚ずつは貼っておきたいところだな。教室棟は、各階それぞれ三枚ずつにするか。そうすると全部で…………三十枚くらいあればいいか」

「鬼ですか、あなたは!？」

「ん？ 私は生徒会長だ。つべこべ言わず、早く作業しろ」

「……。どうやら僕がポスターを描くのは確定なようだ。それも、三十枚……。」

「会長は、なにをするんですか？」

「私はなにもしない。楽をしたいから、お前を補佐にしたのだ。当たり前ではないか」

……こんな人を、一瞬でも尊敬の眼差しで見てしまった僕がバカだった……。

「カラーの太ペンや絵の具なんかもあるからな。適当に使って描いてくれ」

「手描きしろってことですか？ 僕、絵心もデザインのセンスもありませんよ？」

「魂で描け」

「そんな無茶な……」

反論していても、どうせなにも変わらないことが目に見えている僕は、しぶしぶながらポスターを描き始める。

とりあえず太いペンで文字を大きく書いて、あとは適当に模様でも描く程度でごまかそう。

全校お花見大会を開催することその日時や場所さえわかればいはずだし。

「そつえば場所はどうするんです？」

「学園内の公園を使う」

「……学園内に公園があるんですか……」

神龍学園が膨大な敷地を誇るといのは聞いていたけど、どうやら想像以上らしい。

「公園だけじゃない。小さいが森もあるし湖もあるぞ」

……想像以上というか、想像を遥かに超えていそつだ。

「あとは……お花見だし、酒の手配も必要か……」

「……………つて、それはダメです！ 未成年なんですから！」

いくら生徒会長といえど、国の法律を破るわけにはいかない。それに、学園内で飲酒なんて、教師だけだったとしても問題になっってしまうだろう。

「むう、つまらん。しかし、お花見に酒がないのは寂しいな……………」

「そうだ、甘酒にしておこう！」

「それなら、まあ……………」

いろいろと苦労しつつも、こうして全校お花見大会の準備は着々と進められていった。

ちなみに。

開催告知のポスターは、校内のいたるところに貼るだけでなく、スキャナで取り込んでデジタルデータ化し、ギャラクシーネット上の学園サイトにも貼りつけられた。

……………それなら一枚だけ書いて、デジタル化したものをプリントアウトすればよかったのに。

文句をぶつける僕に会長は、

「やっぱり手描きの温かみを感じられるポスターのほうがいいだろうっ。」

と、あっさり答えるのだった。

それから数日後。

全校お花見大会は予想以上の盛り上がりを見せていた。

生徒たちにとっては、午後の授業を潰してのお祭り騒ぎだからというのも、盛り上がっている要因になっているようだ。さすがに丸一日の授業を潰すことまではできなかつたみたいだけど、半日だけでも充分と言えるだろう。

それに、生徒たちだけでなく先生方も盛り上がっている様子がかがえる。

生徒には甘酒が用意されているけど、先生方には結局、日本酒やビールが振舞われることになった。そんなわけで、先生方もかなりの上機嫌。

仮にも学園の敷地内、しかも一部の授業を潰して行われるお花見イベントでお酒を飲むなんて、果たしてこれでいいのだろうか？

「いいのだ」

会長は断言する。だったら、いいだろう。

もし問題になったら、会長を止めなかつた学園長の責任となるはずだし。

飲んでるのが甘酒とはいえ、お花見の楽しい雰囲気呑まれ、僕自身もかなり気分が高揚していた。

ただ少々不満があるとすれば、補佐なのだから当然だろう？ とばかりに、ずっと会長と一緒にいるということだけだろうか。

べつに会長と一緒にいるのが嫌なわけでもないけど、こっぴどい

ベントだったらクラスメイトとも交流できるかも、と考えていた僕の淡い希望は脆くも崩れ去ったことになる。

もっとも、ひとりだけ、今も一緒にいるクラスメイトがいるのだけだ。

「うーん、綿菓子美味しいー！ リンゴ飴も定番よね！ あと、たこ焼きと焼きそばと、それから……」

綿菓子を口いっぱい頬ばりながらご満悦な表情をさらしまくっているのは、もちろんちまきだ。

「食べすぎだつてば」

「いいじゃーん！ せっかく屋台まで用意してくれたんだから、買ってあげなきゃ悪いでしょー？ もぐもぐ」

そう、用意されていたのは甘酒などの飲み物だけではなかったのだ。

様々な食べ物などを売る屋台までもが、学園の敷地内にあるこの公園に、所狭しと並んでいる。

公園自体はそこまで広いわけではなく、しかも全校生徒が参加しているため、スペースに余裕なんてほとんどない。

それなのにこんな屋台まで準備されているなんて……。

自治体が開催するような規模のお祭りや花火大会みたいに、人が溢れてごった返しているといった印象すら受ける。

実際には、歩くのも困難なほどの密度ではないけど、ゆっくりと桜の花を観賞するという雰囲気じゃないのは確かだった。

でも、花より団子。食べ物や甘酒などに舌鼓を打ち、大声を上げ

て馬鹿騒ぎする。

そんな時間は決して無駄じゃないはずだ。

こんなこと、学園の行事としてやってしまっただけでよかったのか、疑問の念は残るものの、参加している生徒たちの笑顔を見ると、これはこれでよかったのだと思えてくる。

……さすがにちまきは、楽しみすぎだと思っけど。

「やっぱり、お花見ていいわよね〜」（もぐもぐ）

「ちまきは絶対、お花見以外を楽しんでると思っけど」

「まあ、そう言っつな、除夜。せっかくのお花見だ、お前も心から楽しんでおけ」

「そうそう、楽しもうよ」

ぐいっ。

「ん、でも……」

「楽しめ。会長命令だ」

ぐいっ。

「え〜っつと……」

なにやら僕の左腕はちまきに、右腕は会長に絡みつかれ、しかもぐいぐい引っ張られているのだけど……。

ふたりとも笑顔ではあるものの、あいだに挟まれた僕の背筋には、猛烈な寒気が走っている状態で……。

この状況で楽しめるはずなのでは……。

などと口が裂けても言えない自分が、少々恨めしい。

「あたしだってね、食べてばっかりじゃないのよ？ ほら、見てみなさいよ。桜の花の背景に青空が、とっても綺麗よね。」

「ああ、そうだな。木漏れ日にきらめいて舞い散る花びらは格別だし、さらには城の景観まで映り込む……。最高のロケーションだろう？。」

「……なぜに城……。」

実際に見上げてみれば、本当に城の姿が目映る。

学園の敷地は広く、お花見大会の会場となっているこの公園の他に、森や湖なんかもあり、そして今現在、建設中の城まである。

西洋風の城で、学園のシンボルにしたい、という理由で建てられているのだとか。

存在は知っていたし、遠目に見たことくらいはあったけど、こんなに近くから見上げたのは初めてだ。

なんとというか、あまりの大きさに圧倒される。

……どうでもいいけど、学園の敷地内に城なんて建てていいものなのだろうか……。

「やあ、サクラン会長。みんな楽しんでいるようだね。」

不意に声をかけられた。正確には、その言葉どおり、会長が、ということになるけど。

声をかけてきたのは学園長だった。

「これは学園長。とてもよいお花見大会になり、私としても嬉しい限りです。」

「先生方まで楽しんでいるようだし、学園側にとってもいい行事と

なったんじゃないかな？ もちろん俺も満足しているよ。……こうしてビールも飲めるしね。ヒック」

学園長は、しっかりとビールを飲んでいた。しかもビンごと持ってラッパ飲み。

かなり顔が赤い。足もとも覚束ないし、酔いが随分と回っている様子だ。

……大丈夫だろうか、この学園長。

こくぶんじすみただ  
国分寺純忠。

神龍学園の学園長を務める偉い人だけど、とてもそんなふうには思えない。

どう考えても三十代前半くらいにしか見えない容姿。

どうやら実年齢は四十代に突入しているらしいけど、学園長といったら、普通はつるっパゲのおじいさんと相場が決まっているというのに。……これは偏見だろうか。

「あの……」

少々控えめに声をかける。

「ん？ なんだね？ 確かキミは、会長の補佐の……」

「はい、射干玉除夜です。それで、あの城って、いったいなんのために建ててるんですか？」

「あれは学園のシンボルだよ。イメージ戦略というのは、学園にも大切なものでね」

僕の質問に、とくに言葉に窮することなく、学園長は答えを返してくれた。

「だけど、なんとなく納得がいけない。今さらこの学園にイメージなんて……。」

悪い意味ではなく、新世代のモデル校としての地位や学業レベルの高さは、すでに充分知れ渡っているはずなのに。それに……。」

「失礼かもしれませんが、そんなシンボルなんかは資金を使うなんて、すごく無駄なんじゃないでしょうか？ 城を建てるのって、膨大な金額がかかると思うのですが……。」

「そんな心配はいらないよ。この学園は、東京都としても力を入れているモデル校だからね。資金も多いんだ。それに……。」

「それに……？」

「城の建設は、都知事からの提案でもあるんだよ。」

学園長の言葉に、僕は驚く。

もちろん、都立高校で東京都としても力を入れているモデル校なのだから、設備投資に積極的なのは不思議ではない。

「だけど、それにしただって城まで建設するのは、イメージアップ戦略としても少々行き過ぎている感がある。」

「……どうして都知事がそんな提案を？」

「さあ？ 親父の考えなんて、俺にはよくわからないな……。」

「親父？」

「ああ。知らなかったか？ 俺の父親は、東京都知事なんだ。」

今の東京都知事は、こくぶんじただお国分寺忠翁という人だったはず。確かに、学園長と同じ名字だ。

「……なるほど、だからこんな若い人が学園長の地位に収まっているのか。」

口には出さないけど、それは納得できた。

でも、どうして城なのかは、やっぱり納得できない……。

「おっと、引き止めてしまって悪かったね。それじゃあ、俺はこれで」

「はい。学園長、あまり飲みすぎないようにしてください」

「はっはっは、心配ありがとう」

酔いで真っ赤な笑顔を残し、学園長は千鳥足でふらつきながら去っていった。

「学園長、完全に酔っ払ってたね」

「そうね」

学園長が去ったあと、僕とちまきは雑談を再開した。

「ちまきは学園長がいるあいだ、まったく喋らなかつたね」

「学園長なんて偉い人相手に、そうそう喋ったりはできないわ。除夜ちゃんはよく、あんなに質問をぶつけられたわね。ちよつと失礼だったかもしれないわよ？」

「え？ そうかな？」

僕としては率直な疑問をぶついただけだったのだけど。

「酔っ払ってたみたいだから、覚えてないかもしれないけど」

「そうであってほしいかな」

普通にこうして会話している今でも、ちまきは僕の左腕に絡みついてたままだ。同様に会長のほうも、右腕に絡みついていてる。

ということは、さっき学園長がいるときも、ずっとそうだったことになるわけで……。

両手に花状態の僕を見て、不埒な生徒だなんて思われてないといけど……。

と、そこで気づく。

普段ならともうるさい会長が、今はやけに静かだということに。

静かにしてはいるけど、僕の右腕にしっかり絡みついたままの会

長。

でも、なんとというか、余計に強く、痛いくらいに絡みついているような……。

「会長……?」

「ん? なんら?」

え? なんら……???

「除夜、どうしたのら? うい、ひつく……」

「か……会長おゝ!? もしかして、酔っ払ってます!?!」

「なにを? わらちは、酔ってなど、いないろ? ひつく!」

「あらら、会長さん、完璧に酔ってるみたいね……」

ちまきが言うまでもなく、顔は真っ赤で、足もともふらふら。

僕の腕に痛いくらいに絡みついていたのは、どうやら自分の足で体を支えることができずに、倒れないようにつかまっている状態だったからのようだ。

「あ……もしかして、さっきの学園長のアルコールを含んだ呼気で酔っ払っちゃったってこと!?!」

「ん、それよりも、甘酒の影響じゃないかな? あたしほどじゃないけど、会長もいろいろ食べながら甘酒を飲んでたし」

僕の推測に、ちまきが別の意見をぶつけてくる。

「え? でも甘酒って、アルコール入ってないよね?」

「製法にもよるのよ。簡単に作る場合には、酒粕から製造することもあるし、大量に飲んだら、小さな子とかアルコールに弱い人なんかだと酔うこともあるみたいよ?」

「そ……そうだったんだ……」

いくらアルコールが若干入っていたとしても、ちまきならともかく、会長はそこまで大量に飲んでなんていなかったはずだけど……。とすると会長は、アルコールに極端に弱い体質ってことになるのかな……？

とはいえ、原因がわかったところで状況が変わるわけでもなく。

「うう。除夜。なんだか目の前がぐるぐる回ってるぞ？ あはははは、なんだこれは？ 面白いな！ ひっく！」

「こんな会長の姿が見られるなんて……。お花見大会、最高だわ！」  
「そんな、面白がってるような状況でもないと思うけど……」

右腕に絡みついたまま酔っ払ってはしやぎまくる会長と、左腕に絡みついて会長の普段では見られない様子を楽しんでいるちまきに挟まれ、成すすべのない僕。

と、突然会長が暴れ出した。

「こらお前！ 除夜はわらちのものら！ 離れるのら！」

反対の腕に絡みついてるちまきを、引き剥がそうとし始めたのだ。

「な……なによ！？ 除夜ちゃんはあたしのものですよ！？ 勝手に所有権主張しないでください！」

……それはちまきにも言いたい。

「これは、わらちのら！」

そう言いながら、片方の腕で僕に絡みつinaながら、反対の腕でちまきを思いつき突き飛ばした。

「きゃっ！」

「ふっ！ 勝利にゃっ！」

地面に投げ出されて倒れるちまきと、勝ち誇る会長。

……あ……、倒れた拍子にちまきのスカートがめくれ上がって、下着がちらりと……。

こ……これは見なかったことにしておこう。そうしないと、僕の身が危ない。

それにしても、会長はどうやら少々、というかなり酒癖の悪い様子。

今後、絶対にお酒は飲まないよう、釘を刺しておくべきかもしれない。

「除夜あゝ、ひっく！」

「うわ、酒臭いですってば！」

僕にしなだれかかる状態の会長の顔は、すぐ目と鼻の先にあつて、甘酒の甘い感じではあるけど、お酒特有のニオイが鼻をかすめる。だけど、僕の文句の言葉は、すぐに止められることになった。

「ん……！？」

気づいたときには僕の唇は、会長の唇がぴったりと……というよりもぐっちよりと重ねられ、完全に塞がれていた。

「わ……わあ……！ なにしてるんですか！」

叫んだのは僕ではなく、会長に突き飛ばされて倒れたままのちまきだった。

僕も叫びたかったけど、口が塞がれているのでは、声の出しようもない。

だいたい、初めてだったのに……。  
ファーストキスが甘酒味……って、これはどうなのだろう？

甘酒のせいなのか、それとも他の要因か、頭がぼーとなった僕は足の力が抜け、膝立ちの状態になってしまう。  
でもそれでようやく唇は離れた。離れてもなお、ほのかな温もりと甘い香りは、僕の唇に余韻として残っていたのだけ……。

ただ、目の前にたたずむ会長の様子は、なんだかまだおかしいよ  
うで。

ふらふらした様子で立ちすくむ彼女の目は虚ろ、赤かった顔も徐々に青ざめてきていて、右手をそっと自分のおなかの辺りに添えている。

そして、前かがみになった状態の会長の顔は、僕のすぐ上にあっ  
て……。

あ……なんだか、嫌な予感……。

思わず他人事のように冷めた感想が頭をよぎった。  
次の瞬間、



いと思った僕は、どうにか彼女をなだめようとする。

……まだ顔面に会長の吐き出した嘔吐物をべったりと貼りつけたまま……。

「うわあ、寄るな触るな近づくな半径三メートル以内に入るんじゃない、ばっちい！」

ちまきは心底嫌そうな顔をして、どこかへ走り去ってしまった。

そう言われても仕方がない状態なのは確かだけど、こんな言われ方をして逃げられるのは、さすがにちよつとショックかも……。

このままちまきを追いかけて、嫌がらせで抱きついて顔を思いつきりこすりつけてやるうか、とも思ったけど思い留まった。どうせあとで、もっとひどい仕返しを食らってしまうに決まっているから……。

僕の横では会長が苦しそうに地面に手を着いて荒い息を吐いている。

息だけじゃなく、まだ出し足りなかったのか別のものも吐き出していただけ。

とりあえず自分の顔をどうにかしたい。でも、この状態の会長をひとり残していくわけにも……。

周囲の人たちも二オイに気づいたのだろう、僕と会長の周りだけ避けるように円形の空間ができていた。

どうしたものか、思案に暮れている僕。しばらくおろおろしていると、誰かが駆け寄ってきた。

「はい、これ使って」

そう言って濡れたタオルを差し出してくれたのは、逃げたとばかり

り思っていたちまきだった。

「あっ、ちまき。ありがとう」

僕はタオルを受け取って、顔に付着した嘔吐物を拭き取っていく。その横で、ちまきは苦しそうにしている会長に気づき、背中をさすってあげていた。

なんだかんだ言って、結構面倒見がいい女の子なんだよね、ちまきって。

会長の具合はよくないようで、地面に突っ伏し、そのまま眠ってしまった。

とはいえ酔いが原因なら少し休めば大丈夫だろう。甘酒で、しかも量も多くなかったから、急性アルコール中毒の心配もないはずだ。そう考えた僕たちは、しばらく休んで落ち着いてから、会長を生徒会室へと運んだ。

僕が会長をおぶって生徒会室へ向かったわけだけど、背中に大きなふたつの柔らかい温もりが感じられて、これはこれで悪くないかも、なんて思っていたのだけど。

その道中において、おぶっている揺れに反応したのか、僕の首筋には何度も嘔吐物が降りかかることになってしまった。

生徒会室でシャワーを浴びて上着をとりあえず体操着に着替え、ちまきも僕のあとにシャワーを浴びて、ようやく一段落したところで、会長は目を覚ました。

全校お花見大会の途中から、まったく記憶がないという会長。まあ、あの状態を考えたら、そうだろうなとは思っけど。

僕としては、べつに会長を責め立てるつもりなんてなかったから、なにかあったかは、あえて言うこともないだろうと考えていた。

だけどもちまきは容赦なく、会長が吐いてそれが僕の顔面にかかって、とつても大変だったと喋ってしまった。

その直前のキスの話を端折ったのは、ちまきの気遣いなのか、それとも別の思惑があったのか。

「そ……そんなことがあったのか……」

「そうですね！ 大変だったんですから！ 除夜ちゃんに謝ってください！」

「ああ、除夜、本当にすまなかった。このとおりだ、許してくれ！」

まだ頭がはつきりしていないのだろうか、会長はちまきの怒号の勢いに負け、僕に向かって素直に謝る。

それも、綺麗な土下座をして平謝り状態。

「い……いえ、いいですってば！ 頭を上げてください！」

「う……うん。もうそれくらいで充分だと思えます」

今までの恨みとばかりに調子に乗って、嫌がらせのように責め立てていたちまきでさえも、さすがに罪悪感に駆られたのか、慌てた様子で僕と一緒に会長をなだめにかかった。

だけど会長は、

「いや、こんなものでは私の気がすまない。本当に悪かったと思っている！」

そう言いながら、それから一時間以上ものあいだ、土下座を崩すことなく謝り続けた。

なんというか、他人の顔面に吐くなんて失態を犯したわけだから、罪悪感を抱いてしまうのも当たり前かもしれないけど、それでもちよつとかわいそうなくらいだった。

会長つて、不測の事態にはめっぼう弱い人なのかも。そんな思いを抱いた瞬間だった。

とつてもつるさい女の子、菱餅先輩が生徒会戦拳のデュエルを申請。

つて、やっぱり戦うのは、僕なんですか!?

次回、第五話、菱餅の挑戦状!

……会長をお姉様と呼ぶあの子つて、もしかして……。

僕と会長は今、廊下を歩いていた。職員室から戻るところだ。もちろん、先生に呼び出しを食らって怒られた帰り、というわけではない。

昨日の全校お花見大会は、一部（会長に）トラブルがあったものの、大盛況のうちに幕を閉じた。

そのお花見大会の準備や後片付けは、先生方がすべてやってくれた。

生徒会長の権限で決めたことに関しては、先生方も積極的に協力する。それがこの学園のルールではある。

それでも、感謝の意を伝えるべく、職員室へお礼参りに行ってきたのだ。

……お礼参りという言い方だと違う意味にも聞こえそうだけど、本当に文字どおりの意味で、各先生方に頭を下げて回った会長。

こういうところは、意外に律儀な人なんだよね。どうしてそれで、僕に対しては強制的に拒否権なく補佐をさせるのか、そして洗濯やら掃除やらも含めて問答無用で雑用係をさせるのか、はなはだ疑問ではあるのだけど。

「除夜、どうした？」

「いえ……お花見大会のときは大変だったな」と思っ

若干意地悪かもしれないとは思っただけど、僕は昨日の話を蒸し返すことにした。

「……すまなかつたな……」

会長はまだ昨日のことを多分に引きずっている様子だから、ちょっと話題に出すだけで、こうしてしゅーんとなってしまう。普段どおりなら高圧的な態度で命令されるだけの僕としては、とても爽快な気分だった。

この状態の会長に言えば、補佐の役目から解放してもらえたりするだろうか？

ぼんやりとそんなことを考えていると、会長から質問が飛んできた。

「ところで、昨日の件だが……。あまり覚えていないのだがな、お前に向かって吐いてしまう前に、他にもなにかやらかしたような記憶も、おぼろげながらあるのだが……。なにか、わかるか？」

……………。

僕としても、そのあとのことのことが衝撃的すぎて、すっかり忘れてしまっていたけど。

そうだった。会長から吐きかけられる前、甘酒で酔った会長は僕にキスを……。

思い出してしまい、顔が熱くなる。

「ん？ どうした？ いったい、なにがあつたんだ？」

そうやって語りかけてくる会長のふたつの綺麗な瞳は、僕のすぐ目の前にあつて。

そこまで身を乗り出して訊いてこなくても……。

「い……いえ、なにもなかったです！」

両肩をつかまれていて完全に逃れることまではできなかった僕は、焦りまくりながら視線だけを逸らす。

そんな僕を、会長は首をかしげながら見つめる。

「どうしたというのだ？ 顔が真っ赤だぞ？ 熱でもあるのか？」

そう言ったかと思うと、会長は前髪をかき上げ、こつんと額をくつつけてきて……。

「……………！」

至近距離に会長の顔。

くつついている部分は違えど、状況的にどうしても昨日のキスが思い出され、僕の顔はさらに赤さを増す。

「どうした？ 熱はなさそうだが、真っ赤だぞ？ 大丈夫か？」

なんて喋りかけてくれる会長の艶やかな唇は、僕の唇や鼻先から数センチ程度の距離しかなくて。

言葉とともに吐き出される会長の息が ほんかに甘く感じられるような吐息が、僕の鼻腔をくすぐる。

考えてみたら、昨日のアレ、僕にとって初めてだったんだよね。

甘酒の味しか覚えていないってのは、なんだかちよつと納得のいかない部分ではあるけど……。

それに、ちまきにまで見られたんだよね。僕以上に驚いているよ。うだったけど。

それなのに、昨日の帰りとか今朝とか、登下校で一緒に歩くあい

だも、意外なほど静かだった気がするなあ……。

あれは嵐の前の静けさで、僕は近いうちにちまきに殴り殺されたりとか、そんな未来が待っていたりはしないだろうか？

……なんというか、ありえそうで、とつても怖い。

それにしても、会長の瞳、すごく綺麗だな……。

あまり気にはしていなかったけど、美人だしスタイルもいいし、見た目だけならモデルとしても通用するくらいだろう。

そんな会長が今、僕のすぐ目の前にいて、額の距離は完全にゼロで……。

会長の全身から漂う爽やかな香りと至近距離から放たれる吐息の影響で、思考回路にも異常をきたして始めているのだろうか、僕はいつも以上にぼーっとしながらも、あれこれと考えが頭の中をよぎっていく。

その様子を、具合が悪いと勘違いしたのか、会長は心配そうな瞳を向けてくれている。

まだ、額はくっついたまま。きらきらの瞳の中に、僕の瞳が映り込んでいるのが、しっかりと見て取れた。

特別教室棟の廊下だから、人通りが少ない場所ではある。

とはいえ、もう放課後。正確に言えば掃除の時間だから、たまに通りがかる生徒がいてもおかしくはない。

ここまで誰も人が通らなかったのは、ラッキーだったと言わざるを得ない。

「会長……」

至近距離にいるわけだから、逆もしかり。僕が喋ればその吐息も会長にかかる。

……口臭とか、大丈夫かな……。  
ちよつと気になったけど、会長の表情が変わったりもしなかったから、問題はなかったのだろう。

「除夜……」

なぜか会長の口調も、温かさというか、穏やかさを含んだ優しいなものへと変わっているように感じた。

いや、もともと心配してくれていたわけだから、最初から優しい口調だったのは変わりない。

だとすると変わったのは、僕の気持ちのほうか……。

……僕の、気持ち……？

ぼんやりと考える。

僕は、会長にとって、単なる雑用係の補佐でしかない、はず……。  
だけど……。

ドキンドキン。

胸の鼓動が、やけに大きく感じる。

この鼓動は僕自身のもの。

だけど、ほとんど距離がないくらいに密着している会長の鼓動も、僕とシンクロするように高鳴っているのかもしれない。

つながった額から、温もりと同時に会長の鼓動も感じられる、そんな気さえしてくる。

廊下は時間が止まったかのように静まり返っている。

僕と会長、ふたりだけの世界。

そんなふたりきりの世界の壁を打ち破って入り込んでくる侵入者

が、突如として僕たちのもとに襲来した。

「ちょっとあんた！ お姉様から即刻離れるのだ！」

突然静かだった廊下に、耳がキーンとなるほどの高音で大音量の  
声が響き渡った。

廊下の壁に反射して共鳴しているからなのか、鼓膜が破れるので  
はないかと思うほど。

ひと言で表せば、凄まじくうるさい声だった。

視線を向けてみると、左手を腰に当て、右手をビシッと前方  
すなわち僕と会長のほうへと伸ばし、人差し指を向けている女の子  
がいた。

怒りの度合いを示そうと大きな音を立てるように高く足を上げな  
がら、ずんずんとこちらに向かって歩み寄ってきている。

もつとも、とっても小柄で小学生と見まごうほどの体型だから、  
ドシンドシンといったような大きな音なんて立つはずもなく。ぺた  
ん、ぺたんと、上履きの音が鳴り響くだけだったのだけど。

たまに若干滑るのか、きゅっ、きゅっとな摩擦音が鳴るのも、なか  
なかに愛らしさを助長させる。

思いつきり怒りの表情を形作っている様子ではあるものの、眉も  
細く童顔なことから、それすらも可愛らしく感じてしまう。

女性に感じる可愛い、という気持ちよりは、小動物に感じる可愛  
い、という気持ちに近いだろう。

ボリュームのあるウェーブがかかった髪の毛を両サイドで束ねてツ  
インテールにしているのも、小型の室内犬を彷彿とさせ、ピンク色  
のリボンで束ねていることも相まって、子供っぽさを際立たせてい

た。

そんな彼女の容姿については、この際置いておくとして。  
とりあえずは彼女の声のせいでキンキンと痛む耳を押さえながら、  
僕はその声よりもさらに気になった単語をオウム返しする。

「お姉様……？」

「そう、お姉様よ！」

断言。

「……妹さんなんですか？」

会長に向き直って、僕は質問してみた。

なお会長の顔は、さっきよりは少し離れた位置にある。このうる  
さい女の子の声で、会長のほうも我に返ったのだろう。

「いや、妹ではない。クラスメイトだ」

「二年A組、ひなまつりひしこ雛松里菱餅だじよ！」

答える会長の声にかぶせてくるかのように、女の子　先輩だから、  
ここう呼ぶのは悪いかな　が自らの名前を名乗る。

どうでもいいけど、「だじよ」って……。

なんとというか、声質だけじゃなくて喋り方までうるさいというか、  
ウザい感じの先輩だ。

「クラスメイトが二年A組……って、そっいえば会長、三年生じゃ  
なかったんですね」

「……今さらか？　まあ、そつだ。最初にも言ったと思うが、私は  
二年だぞ」

「その割に、全校生徒の中で一番偉そうですよね」

「偉そうというか、偉いのだ」

「断言しますか」

「断言するぞ。それがこの学園のルールだからな」

「やっぱり会長は会長ですね」

「うむ、私は私だ」

「ちよつと……ひーちゃんを無視するにや〜！」

いきなり蚊帳の外に出された菱餅先輩が、怒りの声を上げる。

ひーちゃんって、自分のことをそう呼んでるのか、この人は……。  
なんというか、先輩だけとつても子供っぽい人だな。胸もぺ  
つたんこだし……。

僕の視線を感じ取ったのか、菱餅先輩は両手を胸の前でクロスさ  
せるポーズを取る。

「な……なにをじろじろ見てるのだ、いやらしいじよー！」  
「ん〜……」

べつに、これっぽっちもいやらしい気持ちになんかなっていなか  
ったのだけど、いくらこんな見た目とはいえ一応仮にも女性なのだ  
から、恥じらいくらいはあるのだろう。

僕は頭の中で反省する。

「とにかく！ デュエルを申請するじよ！ 会長補佐である、あんなに！」

ビシッ！

勢いよく突き出された菱餅先輩の人差し指は、まっすぐに僕を突き刺す。

「痛たたたた……」

距離を見誤ったか先輩の指は僕の顔面、というか口の辺りに見事にヒット、閉じていた唇から割り込んで歯に当たってしまい、激痛を受ける結果となってしまった。

もちろん、突きを食らった僕のほうも痛かったわけだけど。

「ってというか、汚っ！ 男のだ液がついちゃったじよ！ 指が腐る！」

そう言っつて、必死に僕の制服で指を拭っている先輩。

指が腐るとまで言われるのは、さすがにちよつと心外だけど……。と、それはともかく。

「デュエルっつて、僕に……？」

「そ……そう、あんた！ 生意気にもお姉様の補佐をやっつてやがる、射干玉除夜、お前だじよ！」

フルネームで僕の名前を呼びながら、再びビシツと人差し指を僕に向ける菱餅先輩。

当然ながら距離関係が変わっていないわけだから、その指先は僕の前歯に二度目の突きを食らわせることになってしまう。

「痛たたたた……。そして汚っ！」

……ダメだこの人、学習能力ゼロだ。

「勝ったら、ひーちゃんが補佐になるんだによん！」

涙目になりながら、そう宣言する菱餅先輩。

どうでもいいけど、「にょん」って……。ほんとに高校生なのだろうか、この人は。

だんだんとウザさを通り越して、逆に愛らしささえ芽生え始める。まあ、それはともかく……。

「会長、それってアリなんですか？」

「ナシだな」

そう、生徒会戦拳は、会長に対してのみ認められていること。補佐という立場にあるとはいえ、僕に対してデュエルを申請して役職を奪い取る、なんてことは認められていないのだ。

「えええええ〜〜っ!? ふにゅ〜……」

しおしおと風船がしぼんでいくように、ふにやりと力が抜け、菱餅先輩はその場に倒れ伏す。

「あ……でも、会長を引きずり下ろして自分が会長になってからサクラン会長を補佐にする、って手はあるような……」

ぼそつと、声に出してしまってから、僕ははっとして口を押さえるも、時すでに遅し。

「そ……それだあ〜〜〜!」

意気揚々と立ち上がり、そしてビシツと人差し指を僕に向ける。

「痛たたたた……。そんでもって汚っ!」

……三度目ですか……。

「と、とにかくっ！ やっぱリデュエルを申請するじよ！ お姉様に対して！ ふっふっふ、首を洗って待ってるがいいにゃ〜！」

すぐに立ち直った菱餅先輩は、そんな言葉を残し、廊下を走り去っていった。

廊下は走るな！ と、先生に見つかって注意され、ぺこぺこ頭を下げている姿が見えたりもしたけど……。

それにしても……。

「僕もしかして、ものすごく余計なことを言っちゃいました？」

「まったく、お前は……。ま、どうせ戦うのはお前だからな。せいぜい負けないように頑張れ」

ポン。

会長はため息を伴いつつ、僕の肩にそっと手を乗せるのだった。

デュエルは、原則として申請してから一週間後となる。

あれから毎日のように、菱餅先輩は僕と会長の目の前に現れ、絶対に勝つからや〜！と、しつこく騒ぎ立てた。

ちまきが一緒にいてもお構いなし。なによ、あの小さい子、とつぶやいたちまきにまで噛みつくように、菱餅先輩は毎度毎度キンキンと耳に響くうるさい怒声を浴びせ続けてきた。

べつに作戦とかではなく、デュエルまでの時間が待ちきれず、居ても立つてもいられなくなって怒鳴りに来ていたのだろうけど。

なんとも暇な先輩である。

そんなこんなで、デュエル当日となった。

菱餅先輩のことであまり気にならなくなってはいたけど、ちまきは先日のお花見大会のあとから、意外なほどおとなしいまま。

なにかが水面下で進行していそうで、とっても怖い……。

とはいえ、今は目の前の菱餅先輩とのデュエルに集中しないと。

会場の準備はとつくに整っていた。

なお、前回と同様、デュエルの会場は校庭。

擬似空間の周りには当然のように野次馬が集まり、観衆を煽る放送部員の実況も響き始めている。

それにしても……。

前はゴツくてマッチョな総合格闘技部部长が相手だったから、僕のほうが気後れするくらいではあったものの、戦うこと自体に抵

抗はなかった。

「ただ今回は、先輩とはいえ女子生徒……しかも、見た目がちゃんまい小学生みたいな菱餅先輩が相手。」

さすがにちよっと、戦うことに抵抗を感じてしまう。

「もちろん、精神体になって戦うわけだから怪我をさせてしまう心配はない。」

「なにも気にする必要はないのだけど……。」

「えっと……女の子相手に、戦うんですか？」

会長に尋ねる。

「戦いは、精神体とはいえ自らの肉体を使ったものとなる。パンチやキックだけじゃなく、締め技なんかも含めたプロレスのような感じとなるのが普通だ。」

「場合によっては武器を使用する戦いも可能だと聞いたことはあるけど、通常のデュエルでは、自らの体を動かすのと同じように自らの姿をそのまま投影させた精神体同士での戦いとなる。」

「だから、女の子を殴ったり蹴ったりあまつさえ締め技をかけるなんて、どうしても抵抗を感じてしまうわけで。」

でも会長は、簡潔に答えを返してくる。

「デュエルは擬似戦闘だ。気にせず思いきりやってしまえ」

「そう言われても……。」

「僕の目の前には、すでに菱餅先輩。正確には菱餅先輩の精神体が、両手を腰に当てたポーズで立っている。」

「服装は制服。僕も制服姿だ。」

「なにを気にしているんだ？ 相手がスカートだからか？ しかし、ガード機能が働くわけだし、絶対に見えないようになってる。気にすることはないぞ？」

「いえ、そういうことでもなくて……」

弱気な僕を、若干イライラを含んだ会長の声が襲う。

会長は擬似空間の外ではあるけど一番近い位置に陣取り、僕に話しかけてきている。

デュエルが開始されるまでは、セコンド役のパートナーがいる場合には、作戦会議など、会話する時間も設けられているのだ。

もつとも、会長は「とにかく勝て」とか言うだけで、なんの役にも立ちはしないのだけど。

「女の子を殴るなんて、男としてはやっぱり……」

「ふむ……」

僕の言葉に、ようやく言いたいことを理解してくれた会長。

「だが、たとえ胸を殴ったとしても、柔らかかさなんて感じないようになっている。気にすることはないぞ」

そうやって解説を加えてくれた。

デュエルのシステムは、僕が戦わされることになってから細かく調べてある。だから、それはすでに知っていた。

会長の解説は、まったくの無意味と言ってもいいだろう。

「……すまん、菱餅。お前はもともと、まったく膨らんでいなかったな。精神体でなく実際に殴っても、柔らかさを感じるはずがない。見くびってすまなかった」

「な……！？ ムッキー！ どうせペチャパイだよ！ ……許す

まじ、射干玉除夜！」

「なぜ僕っ!？」

会長の言葉で菱餅先輩は怒り心頭。その怒りの矛先は、どういうわけだか僕のほうへ。

どうやら会長の解説は、無意味を通り越して、対戦相手のパワーアップにつながるマイナスの効果をもたらしてしまったようだ。

「あんたの存在が悪なのだ！ あんたさえいなければ、今頃ひーちゃんはお姉様とふたりであんなことやこんなことをして、楽しい高校生活を送っていたはずなのに！」

……よくわからないけど、菱餅先輩の中では僕が完全に悪役となっているようだ。

菱餅先輩から会長を奪った極悪人、といったところだろうか。べつに僕は、会長を奪ったわけでもないのに。

というか、最初から思っていたことだけど、会長をお姉様と呼んで、なにを考えているのかは知らないけど会長とあんなことやこんなことをする想像をしているなんて……菱餅先輩って、やっぱり百合な感じなのだろうか？

なのだろうか、というより、きっとそうだろうな、としか思えないけど。

「会長って、僕が入学してくる前って、菱餅先輩と仲がよかったんですか？」

「いや、単なるクラスメイトだぞ？ 確かに一年のときも同じクラスではあったが、私は生徒会長になってから、ほぼずっと生徒会室で生活していたからな。クラスメイトとの交流なんて、菱餅だけでなく、誰ともなかったぞ」

……学生として、それは寂しすぎなのではなかるうか？ という  
思いはこの際置いておくとして。

とりあえず菱餅先輩の百合っぽい想いは、完全な一方通行の勝手  
な妄想にすぎないようだ。

「お姉様！ そいつに洗脳されてしまったのかに！？ 待っていて  
ください、お姉様。すぐにひーちゃんが救い出して差し上げますじ  
よ！ 死ね、射干玉除夜！」

妄想暴走モードだというのがわかったところで、事態が好転する  
わけではない。

菱餅先輩が怒りの視線を僕にぶつけてきたところで、デュエル開  
始のゴングとスタートを宣言する放送部員の実況の声が、同時に鳴  
り響いた。

菱餅先輩は小柄な体を活かして、ちょこまかと動き回った。その度にポリユームのあるツインテールの髪の毛がバツバツサとなびき、本人の顔面にまでぶつかつたりして、

「ああ、もう、鬱陶しいじょー！」

自分で自分の髪の毛に怒りをぶつけていた。

「それもこれもあんたのせいじゃ！ 射干玉除夜！ 覚悟！」

……訂正。なぜだか僕に怒りがぶつけられた。

会長には、気にせず思いきりやってしまえ、と言われたけど……。先輩とはいえ見た目が小学生っぽい女の子に対して暴力を振るうなんて、やっぱりできるものでもなく、僕は防戦一方。

「えいつ！ やあつ！ たあ〜っ！」

小さな体から繰り出されるパンチやキック。

でも、圧倒的にパワーが足りない。

たとえクリーンヒットしたとしても、ほか、ほか、ほか。そんな濁いた音が鳴り響くのみ。

精神体だから本気で殴ったとしても痛みを感じるわけではないけど、僕の頭上に表示されたヒットポイントのゲージは、まったく減っていく気配がない。

子供っぽい先輩だと思ってはいたけど、本当に子供を相手にして

いるような、そんな感覚だった。

ここは僕が抱え上げるなどして動きを封じ、擬似空間の周りを囲む外壁のさらに上から外に放り投げてしまうことで、菱餅先輩の失格負けにするのがいいかな、なんて考え始めていた。

小さな子供のように両手を振り回して僕のおなか付近をひたすら叩きまくっている状態の菱餅先輩を、僕だけではなく会場の野次馬たちもみんな、微笑ましく見つめていた。

……………のだけど……………。

ぼかぼかぼかぼかぼかぼかドムッ！

「……………！？」

ぼかぼかぼかぼかぼかぼかドムッ！ ぼかぼかぼかドムッ！

「……………！！！？？ ………………！！！！？？？？」

渴いた音を響かせるだけのパンチの連続の中に、たまに見事にみぞおちの急所をえぐる鋭いパンチが混ざる。

それは、ひっきりなしに繰り返される子供パンチの中で、たまたま入っただけの偶然のパンチのように思えた。

でも……………。

痛みがあるわけではないけど、ヒットポイントのゲージは、みぞおちをえぐられる度にぐぐつと大幅に減り、僕のおなか付近になんとも言えない重苦しい感触が広がる。

『お~~~~っつと！ ひーちゃんの可愛らしいパンチ攻撃で、偶然にもクリティカルヒットが連発！ これはすごい！ デュエルの行方

も、これで俄然わからなくなってきました!』

「おおおおお~~~~ん!

歓声が響く。

娯楽の意味合いが強い戦いの場合、見るからに弱いほうを応援する人が圧倒的に多い。

「ひーちゃん、頑張れ~~~~!」

観衆の声援は、ほぼすべて、菱餅先輩を応援するものになっていた。

「だけど……。」

にやり。

僕は見た。

僕のおなかの陰に隠れるような位置取りでポカポカ殴りを繰り返す菱餅先輩が、ふっ、と鼻を鳴らし、悪魔のような顔であざ笑っているのを。

「これは……菱餅先輩の作戦!？」

「ちょっと、除夜ちゃん、頑張つてよ!」

会長は黙り込んだままだし、僕を応援してくれるのは、どうやらちまきだけになっているようだ。

「へえ〜。あの子、あんたを応援するんだに〜」

ぼそぼそと、僕のおなかの下辺りから声をかけてくる菱餅先輩。お子様作戦で、すべての観衆を味方につけられると踏んでいたの

だろう。

「ちまきは、無条件で僕の味方だから」

「へへ、ちまきちゃんって子なんだに。でも、そんな子がいながら会長に色目を使うなんて……。絶対に許せないじよ！」

「いや、べつに僕は色目なんて使ってないけど……」

「問答無用なりっ！」

そう叫ぶと、菱餅先輩は僕のおなかの陰から飛び出し、一旦距離を取った。

どうやら次の一撃で決めるつもりらしい。

応援……それは気分を奮い立たせるという効果もある、重要な要素。

普通のスポーツなんかでも、大きな力になる場合がある。

ましてや精神体で争われるデュエルならば、その影響力がよりいっそう大きなものとなるのは必至。

菱餅先輩は今、黙ったままの会長と無条件で僕の味方であるちまきのふたりを除き、他のすべての観衆から応援の力をその背に受けている。

……………これは、負けたかも……………。

こんなふう<sup>に</sup>に弱気になること自体、精神体のデュエルにとっては致命的だという基本中の基本すら忘れるくらい、僕の勢いは衰えていた。

「これで、終わりだによ～～～～ん！」

甲高い叫び声を放ちながら、文字どおり飛びかかるような勢いで、一直線に僕へと向かってくる菱餅先輩。

距離を取ったのは、助走の距離を稼ぐため。  
そして、背中に受ける声援のパワーを、繰り出す一撃に乘せるため。

僕は防御の構えを取る以外に、成すすべがない。  
思わず、目をつぶる。  
その瞬間。

「あ

と、菱餅先輩の可愛い声が響く。  
続けて、

「わっ

との声が吐き出され、

「ぶぐらわぎゃぬむっ!!」

よくわからない、カエルが潰れるかのような悲鳴が聞こえ、

ズザザザザザッ!

と、なにかがこすれるような音が続き、

「きゅ〜〜〜……」

最後にしぼんだ風船のような声が残される。

衝撃は、もちろんない。

僕が目を開けると、その音から想像がついていたとおりの光景が広がっていた。

目の前で、菱餅先輩がうつ伏せになって倒れている。

途中でつまずき、思いつきり前のめりに顔面から倒れ込み、慣性の法則に従いそのまま顔面だけで地面を滑り、僕の目の前の位置に来てようやく止まって、この状態に至った。

おそらく、そんなところだろう。

というか、それ以外に考えられないけど。

単純に転んだだけではない。背に受けた幾多の声援パワーも上乘せされていたのだ。

それらすべてが顔面に打撃となって集中した。

もちろん精神体だから、実際に受ける痛みの感覚はないはずだけど……。

ピクピクと痙攣する菱餅先輩の様子を見る限り、かなり精神的ダメージを受けた状態なのは確かだろう。

菱餅先輩の頭上のヒットポイントゲージを確認してみれば、真っ赤な表示。あとほんの数ミリ、雀の涙程度残っているだけのようだ。

「すみません、菱餅先輩」

すつつ。

僕はトドメを刺すべく、先輩の首筋辺りに手刀を振り下ろした。

ヒットポイントゲージはぴったりゼロとなり、展開されていた疑似空間は空気に溶けていくように霧散した。

『しよ……勝者、射干玉除夜あ~~~~!』

うおおおおお~~~~ん！  
歓声が響く。  
でもそれは……。

「お前、あんな小さい子に、しかも無抵抗になった子に、なんてこ  
とを！」

「ひどすぎよ〜！」

「信じられない！ 鬼！ 悪魔！」

「まさに、鬼畜の所業！」

といった、僕を非難する声の嵐だった。

「ぴぎゃ〜！ 痛かったじよ〜！」

「ひーちゃん、かわいそう〜〜！」

精神体のデュエルだから痛いはずなのに、なんてことが、この  
場で通用するはずもなく。

僕は菱餅先輩をいじめた極悪非道なヤツ、というレッテルを貼ら  
れることになってしまった。

悪者にはされてしまったけど、僕は勝った。会長の二回目の防衛  
にも、こうして成功したのだった。

ところで。

なぜか会長がずっと黙り込んでいたな〜と思って近寄ってみると、  
会長は今でも目をつぶって腕組みしたまま。

「会長……？」

声をかけてみると……。

「はっ！？ むむむ……寝てた！」

……。

スパーーーーーン！

寝ぼけまなこの会長の頭に思いっきり入れた平手打ちの音は、晴れ渡った青空に清々しいほど大きく響き渡った。

端午の節句には鎧兜。

雨を止ませるにはてるてる坊主。

そりゃあ、順当な展示物だとは思いますが……。

次回、第六話、コスプレも補佐の仕事なの？

……あつ、ちょっと会長、やめてください、そんなこと……っ！

「端午の節句が近いな！」

「……………そうですね」

生徒会室にて。

会長が目をキラキラさせて意気揚々とこんなふうに叫ぶのは、決まってなにか思いついたときなわけで。

嫌な予感しかしない僕は、適当な受け答えで流そうとしたのだけど。もちろんそんなのは無駄な抵抗というもの。

「男性の祭りだが、ここはせつかくだから全校で祝おうじゃないか

「！」

「……………やっぱり……………」

お祭り騒ぎ大好き人間なのだろうか、この会長は。

なのだろうか、というよりも、なのだろうか、という確信だったわけだけど。

「巨大な鯉のぼりを飾るぞ！」

「はあ……………」

「もちろん、鎧兜も用意するからな！ いやあ、忙しくなるな〜！」

会長の目のキラキラは、これ以上ないくらいの輝きを放ち始めた。そのうち、レーザービームでも飛び出しそうだ。

「レーザービームくらい、今でも出せるぞ？」

「ええっ！？ マジですか！？ っていうか、あなたは人間ですか

！？？」

驚き桃の木山椒の木。

「……いや、さすがに冗談だぞ？」

「そ……そりゃあ、そうですね！ あははは……」

しまった。

会長ならレーザーくらい出せてもおかしくない、なんて考えてしまった思考回路は、早急に改めなくては……。

いつの間に僕はこんなに常識のない人間になってしまったのだろう……。原因は会長本人だと、わかりきってはいるけど。

ともかく、会長がここまで乗り気になっているのだから、端午の節句イベントを開催する方向で進んでいくのは決定事項だろう。

会長がお祭り騒ぎ大好き人間だというのは、確信を通り越して、確定、そして必然へと昇華。もはや自然の摂理と言ってしまったもいいかもしれない。

「ま、いいじゃない。授業がサボれるなら、なんでもいいわ！」

「……おい、お前。なんでここにいる？」

平然と会話に加わってきたのは、もちろんちまき。

ついさっきまで、いなかったような気がするのだけど……。

「細かいことは気にしちゃダメ」

「気にするぞ。出ていけ！」

「嫌です！」

ちまきは、頑として居座るつもりらしい。

さほど広くない生徒会室ではあるけど、人がひとり増えたくらい

なら大して変わらないだろう。

「バカもの！　ここは私と除夜の愛の巣だ。部外者が入ってくるのは断固拒否する！」

「ちよつと会長、愛の巣ってなんですか！？」

「そうよ！　っていうか会長さん、こんなところに除夜ちゃんを拉致監禁するなんて、犯罪ですよ犯罪！」

「お前こそ犯罪だろう！　その存在自体が！」

「あたしのなかが犯罪だって言うんですか！？」

「騒音公害だバカたれ！　生徒会室では大声厳禁だ！」

「会長、あなたは人のことをとやかく言えません！」

……どうやらちまきの場合、ひとり増えただけで騒音レベルは数倍にも膨れ上がるようだ。

数十秒後、隣の家庭科室で部活動中だった家庭部の女子生徒たちにうるさいと怒鳴られてしまい、僕たち（会長含む）は平謝りする結果となるのだった。

「ふう……。ちまきのせいで、大変な目に遭ったよ」

家庭部の部長さんたちへの謝罪を終えて生徒会室に戻るなり、僕はぼやき声をこぼす。

「ちよつと、あたしのせいだって言うの！？」

「怒鳴っちゃダメだってば。だいたいどうして、ちまきが生徒会室に来るのさ？」

「……あたしなりに考えたのよ。会長には、事故みたいなものはいえ、一歩先に行かれちゃったし。もつと頑張らないとって」

「どづいうこと？」

「……ふう……。なんでもないわよ、この鈍感」

「???？」

ちまきの言いたいことはまったくわからなかったけど、とりあえずこの話はここまで、と目で語っているの、これ以上とやかく言わないことにした。

「えっと……それで、なんの話でしたっけ？」

「端午の節句だな」

「ああ、そうでした」

ここでようやくやく話の軌道修正を達成する。

脱線が多すぎるのも自然の摂理ってことで、仕方がない事象なのだ。

「イベントっていいわよね、授業を潰せるし！」

そうそう、こうやってちまきが会話に割り込んできたせいで、脱線してしまっただけ。

今度こそしっかり車線を守れるよう、ちまきの言葉は無視するとして。

「端午の節句ってことは、こどもの日ですよ？」

「ああ、そうだ。……なんだ、除夜。高校生はもう子供ではないとも言いたいのか？」

僕の指摘に、会長は少々不機嫌そうな顔で言い返してくる。

自分の意見が通らないと機嫌が悪くなる会長は、まさしく子供と  
言えるのかもしれないけど。

「いえ、そうではなくて……」

「だったら、なんだと言うのだ。はっきり言え！」

「こどもの日って祝日ですよ？ 休みの日に学校行事イベントを開  
くんですか？」

……沈黙。

「し……しまった、盲点だった！」

うわっ、気づいてなかったのか、この人！

生徒会長がこれでは、先行き不安だ……。

「そそそそそうよ、祝日なのよ！ かかかか会長さん、そそそそん  
なことも気づかなかったんですかっ！？ バババババカなんじゃな  
いですかっ！？」

そしてここにも、気づいていなかったらしき人がもうひとり。

こんなにも明確なもり方をするというのも、珍しいを通り越し  
てある意味すごい気がする。

僕の周りって、どうしてこう、間の抜けた人間しかいないのだろ  
うか。

……一瞬「類は友を呼ぶ」などという言葉が頭をかすめたけど、  
僕はそれをすっぱりと振り払った。

実際のところ、祝日だったとしても代休を設けることさえできれば、学校行事の日にしても問題ないわけだけど。その場合でも、納得のいく理由づけができなければ、実現するのは難しい。

先生方の都合もあると思うし、それ以前にこどもの日はゴールデンウィーク中だから、旅行の予定をすでに立てている人だっているだろう。

そんなわけで僕たちは計画を練り直し、少し早いけどゴールデンウィークの前半、四月の終わりの平日に端午の節句イベントをやってしまうことにした。

今年は祝日のあいだに一日だけ平日となってしまうため、そこをイベントの日とすれば生徒にとっては嬉しいはずだからだ。

先生方としても、せっかくのゴールデンウィークのあいだに授業なんてやりたくないようで、むしろ乗り気な感じだった。

前回同様、開催を知らせるポスターを僕が作成、会場の準備などは先生方をお願いして、イベント当日を迎えた。

「本日は端午の節句のイベントだ。とはいえ、男子のためだけのイベントというわけではない。全校生徒の諸君、男女問わず、思う存分楽しんでくれ！」

会長の宣言により、イベントは開幕した。

基本的には、テーブルに料理が用意されているのを自分で取りに行くバイキング形式の食事がメインのようだ。

バイキング形式といっても料理はほとんど日本食となっている。端午の節句は日本独自のイベントだし、当たり前かもしれないけど。

なお、先生方のために日本酒が準備されているみたいだけど、今回、生徒用の甘酒はない。

僕はほっと胸を撫で下ろす。

会長が酔っ払ってしまい、お花見イベントのときのような醜態をさらす姿なんて、もう二度と見たくない……というよりも、僕自身がとんでもない被害を受けることになるし、会長の泥酔は絶対に阻止すべき事態だからだ。

アルコールにめっっぽう弱い体質の会長でも、いくらなんでもジュース類で酔っ払うことはないだろう。

そんな僕の考えは、甘かったと言わざるを得ない結果となるわけだけど……。

ともかく、イベントでは鯉のぼりがいくつも立てられ、鎧兜もたくさん飾られ、それ以外に有志の部による出し物なども実施されていた。

軽音楽部のライブは大きな盛り上がりとなったし、演劇部の劇もなかなかの完成度。

かなり突発的なイベントだった割には、大盛況と言っていいだろう。

端午の節句とはあまり関係なく、みんなそれぞれに騒いでしゃいで楽しんでいるだけ、という気がしなくもないけど。

でも、学校行事のイベントなんて所詮そんなもんだよね。

……ただ、僕にはひとつだけ不満があった。

「僕、どうして鎧兜を着せられてるんですかね？」

「そりゃあ、端午の節句の主役とも言っべき存在だからな。必要だろっつ。」

くぐもった僕の声に淡々と答えてくれたのは、もちろん会長。

僕の声がくぐもっているのは、重苦しい鎧兜を着ているからで…。

「いや、だから、どうして僕が着る必要があるのかってことで……」

「そりゃあ、決まっている。面白いと思ったからだ。イベントとしても、いい演出になるだろうと考えてな」

「……誰も気にしてくれないみたいですけど？」

「はっはっは！ そういう誤算も、たまにはある」

……たまに、だろうか？

文句の声もどうせくぐもってしまうし、僕は口に出すのを諦めた。

「だけど、これってチャンスですよね」

不意にそんなことを言い始めたのは、当然のようにそばにいた、ちまき。

「動けない除夜ちゃんに、あんなことやこんなことしちやえ」

「ご機嫌な様子で鎧兜の下のほうから手を突っ込もうとする。

……というか、実際に手を突っ込んでくる。

「ちょ……ちょっと、ちまき！ やめてよ！ほんとに動けないんだから！」

僕が着ているのは、本格的な鎧兜。精巧に作られた芸術的な造形で、その重量もかなりのもの。

体力に自信のない僕には、動くことさえままならない状態だった。

「動けないからこそよ！ うへへへへ、さてさて除夜ちゃん、覚悟しなさいよ！」

「お前はダメだ、私がやる！ そこをどけ！」

「嫌ですよ！ っていうか、もうあたし、手を突っ込んでますし！」

「むづ、ならば仕方がない。今日のところは、ふたり同時にするということ……」

「しょうがないですね。今回だけは、それで手を打つことにします」

「ふっふっふ、お主も悪よのお」

「いえいえ、会長様ほどではございません」

「ちよつと、ふたりとも！ なにをする気なのさ〜!？」

貞操の危機!？

なんて思ったりもしたけど、僕はなにをされることもなかった。

「……鎧兜の守りは、強固だな……」

「ええ……、つまらないです……」

どうやら僕は、しっかりと鎧兜に守られたようだ。ビバ、鎧兜！  
ただ……。

「とりあえず、やけ食いしましょう」

「そうだな」

と言って、動けない僕がじっと見つめる前で、自らお皿に取って持ってきた大量の料理を胃袋に流し始める会長とちまき。

しばらくすると、会長の目が虚ろになってきた。  
心なしか、顔も赤くなってきたような……。

はっ！ もしかして、この状況は……！  
ゆらり……。

トロンとした瞳でふらつく足取りの会長が、僕の目の前まで迫ってくる。

「あ……このカブ、日本酒に漬け込んであるみたい。こっちの梅干しも日本酒漬けたわ」

ちまきの言葉で、悪い予感はずっと確信へと変わる。

「あつ！ 会長さん、抜け駆けはダメですよ！？ ……って、あれ？ もしかして……」

「ちまき……助けて……」

動けない僕が涙目で訴えかけるも、敵（会長）はもうすぐ目と鼻の先にまで迫ってきていて……。

「除夜あゝ、お前、綺麗な目してるな。ういゝ、ひっく……」  
「か……会長……」

兜から出ている僕の顔に、会長が自らの顔を寄せてくる。  
そして……。

「うっ……」

会長の顔が一瞬で青ざめたのがわかった。もちろん、僕の顔も別の意味で青ざめる。

……こうして僕は、全校お花見大会のときと同じ災難に見舞われることとなってしまった。

この鎧兜、借り物のはずなのに……。

イベントの直後は、再び会長の平謝りを受けることになったりしたけど。

ゴールデンウィークも終わり、しばらく経って五月も後半になると、地獄の中間テスト期間へと突入した。

地獄の、と表現しているのは、僕の成績があまり芳しくないからだ。

仮に学年最下位だったとしても、生徒会長補佐の任務を解かれる、ということはないと思う。

……そうならならなっただ、構わないような気がしなくもないけど。

ただ、成績や役職などはデータとして残ってしまうわけだから、将来のことを考えると、上位とは言わないまでも赤点を取って追試を受けるような事態だけは避けておくべきだろう。

赤点さえ逃れればOKと考えている時点で、志が低いと言わざるを得ないな……。

ともかく僕は、一生懸命勉強した。……と胸を張って言えるほどではないものの、それなりに勉強時間は取るようにした。

放課後は生徒会室に出向くことを義務づけられているため、勉強のためにまっすぐ家に帰ったりはできなかったけど。

いかに生徒会長といえども、テストを受けるのは必須。生徒会室では、会長も黙々とテスト勉強に励んでいた。

学年が違うから、同じ場所で勉強している利点はあまりない。

こう言ったら失礼かもしれないけど意外に優秀な会長。僕より一

学年上でもあるわけだし、わからない部分があつたら会長に聞くという手も使えなくはないだろう。

でも、会長自身も柄にもなくエアコムのウィンドウに集中してテスト勉強に勤しんでいることを考えると、邪魔をしたら悪いという気持ちになり、結局は自分で調べてどうにかするしかなくなつてしまった。

なお、同じ学年でもちまきは役に立たない。頭はいいのだけど、人に教えるのが極端に下手だからだ。

それに、以前は登校時も下校時もべつたりくつついてきていたちまきだけど、最近は僕を残してひとり登下校することもある。

今はテストも近くなつて、勉強のためという理由もあつてか、生徒会室に顔を出す機会もかなり減つてきた気がする。

なんとなく寂しさを覚えてしまうけど……。

ともかく、そばにいないことが多くなつているちまきに、テスト勉強に関係する質問などができるはずもない。

そして数日後、中間テストが始まつた。

会長と僕は、授業だけでなく、テストも生徒会室でエアコムを使つて受ける。

テストではエアコム内の教科書やノートの参照は不可。参照した時点で記録として残つてしまうので、カンニングはできない。

だから授業同様、許可さえあればどこでテストを受けても構わないことになっている。

実際に紙に書いたカンニングペーパーを持ち込む可能性なんかもありそうだけど、そういう場合には心拍数のデータなどから感知されて、結局バレてしまうのだとか。

もちろん僕は、真面目にテストと向き合っている。

会議テーブルを挟んだ向こう側に座って同じようにテストを受けている会長に、僕はふと視線を向けた。

綺麗な長い髪をサイドテールに束ねた会長が、微かに眉をしかめながら考え込んでいる。

やっぱり会長って、黙ってさえいれば聡明そうだ。

考えてみると、僕は学園生活のほとんどの時間を、この会長と一緒に過ごしていることになるんだな……。

いつでも一緒な相手って、中学の頃まではずっと、ちまきだった。今でもちまきとは頻繁に会っているけど、それよりも会長とともに過ごす時間のほうが長くなってきている。

この神龍学園に入学して、初日でいきなり大遅刻して会長と出会い、僕の人生は大きく変わったと言っても過言ではないのかもしれない。

「ん？ どうした？」

僕の視線に気づいた会長が顔を上げ、問いかけてくる。

「……いえ」

慌てて視線を逸らし、僕はそっけなく答える。

ぼーっとしていただけではあるけど、会長を見つめていたのは事実。だからちよつとだけ、恥ずかしい気持ちがあったのだ。

「私の美貌に惚れ直したか？」

「惚れません！」

会長はやっぱり会長だった。ひょうひょうと言つてのける会長に、僕は即答で否定を返す。

「それに、惚れ直すつて、すでに惚れてること前提の言い方ですよ  
ね!？」

「なんだ、そうじゃなかったのか」

「当たり前です!」

「なぜだろう、少々残念だな」

「え……?」

「い……いや、なんでもない」

一連のやり取りで、なぜか頬を染めながら、会長は再びテストに集中し始めた。

さつきも言及したとおり、やりたい放題の生徒会長でも、テストを受ける必要がある。

赤点を取れば追試が待っているし、その追試でも成績が悪かったら、場合によっては落第ということだってありえるわけだけど……。会長は学年上位の成績を修め続けているらしいから、まったく心配なさそうだ。

鼻歌まじりにテストに臨んでいる姿には、苛立ちすら覚える。

根本的に頭の出来が違っているのだろう。僕みたいな人間から言わせてもらえば、不公平としか言いようがない。

と、他人を羨んでいても仕方がない。今は自分のテストに集中しないと。

気合いを入れ直して頑張ろう!

こうして地道にテストをこなしていったのだけだ。

落第の心配まである僕は、プレッシャーにも苛まれ、しかも五日間にわたって行われる長丁場のためか、すべての教科のテストが終わった頃には、口から魂が抜け出るのではないかと思うほどに疲れ果てていた。

「除夜、お疲れ様」

珍しく、会長から労いの言葉をいただけた。

「あ……会長も、お疲れ様でした」

「私は大して疲れていないがな。しかしお前は、かなり気合いが入っていたようだから、さすがに疲れただろう？」

「……はい、確かにちよつと、疲れました」

会長、なんだかんだ言っても、僕の様子までちゃんと見てくれていたんだ。

意外な気遣いに、ほわんと心が温かくなるのを感じた。

「……そうだな。テストの疲れを癒すためのイベントでも開催しようか」

「え？ べつにいいですよ、そんなの」

そう答えながらも、すでに会長の頭の中では、イベントの構想が練られ始めているのを確信していた。

会長は、そういう人なのだ。

やると言ったら実行に移すのは早い会長。

六月に入るとすぐに梅雨入りしたことに合わせて、それをイベントの口実とした。

梅雨特有のじとじとした湿った細かな雨が降り続く毎日。そんな天気ばかりでは気分も滅入ってしまう。

ということ、晴天を祈願するためのお祭りを開催する運びとなった。

ポスターはもちろん、僕が作った。

晴天を祈願するお祭りでは、名称としてはちょっと微妙だろう。

そう考え、もっと簡潔でわかりやすい名前を会長に決めてもらったのだけど……。

その名称が、『てるてる坊主祭り』だった。

長さ的にもほとんど変わりないし、それも微妙だとは思ったものの、ポスターは迅速に用意する必要があったため、この名前で決定と相成った。

それにしても、てるてる坊主祭りって……。いったい、どんな祭りなのやら……。

こんなイベントを開催して、人なんて集まるのだろうか……。

僕の不安をよそに、フタを開けてみればイベントは大盛況。

外はどんよりと垂れ込めた薄暗い雲からじとじと雨が降り続く典型的な梅雨の天候。さすがにそんな中で、校庭やら公園やらといった屋外でイベントを行うわけにもいかない。

そんなわけで、今回のイベントの舞台は体育館となっていた。

様々な飲み物や食べ物が用意され、有志の部による余興の数々も催された。

はつきり言って、今までのイベントと大差ない。

違いといえば、体育館での開催となったことと、その体育館の天井……は届かなかったため、上側の窓の前にある足場から、たくさん大きなたるる坊主が吊るされたこと。

「このお祭りって、やっぱりおかしくないですか？」

「ん？ まあ、なんだっていいのだ。お祭り騒ぎさえできれば」

僕の疑問に、平然とそう返してくる会長。そうだ、会長はこういう人なんだった……。

だけど、会長だけに留まらず、参加しているこの学園の生徒たちも、少々変わり者の集まりと言えるのかもしれない。

……もちろん僕自身は除く。

「学生というものは、えてしてお祭り騒ぎが大好きなものだからな」  
「……それはいいんですけど……」

会長は、僕の間テスト疲れを癒すと言って、このイベントの開催を決めたはず。

それを考慮すると、いささか納得のいかない部分が、僕にはあった。

「どうして僕は、こんな格好をしてるんですか？」

「それはもちろん、イベントの主役とも言つべきでる坊主役を、会長補佐であるお前に任せるためだ。思ったとおり、似合っているぞ？」

「似合いたくなんてありません！」

文句をぶつける僕は、頭からシーツをかぶせられ、首の辺りをリボンでくくられ、てるてる坊主として吊るし上げられている状態だった。

普通のとてる坊主のように首のロープでくくって吊るしてしまつと、思いつきり首吊り死体になってしまつので、吊るすためのロープは両肩のほうに巻きつけられているけど……。

それでも僕は、身動きの取れない状態だった。

自然と、端午の節句イベントの記憶が蘇る。

そんな僕のそばには、いつもどおり会長と、そして、

「え〜？ 可愛いのに〜！」

とのたまう、ちまき。

なんとなく、というか完璧に嫌な予感がする……。

「こんな状態じゃあ、テストの疲れが癒されたりなんてしませんけど……」

「誰もお前を癒すなどとは言っていないだろう？ 私自身がお前の姿を見て癒されるからいいのだ」

そう言いながら、手で口を押さえ、ぷぷつ、と小さく吹き出す。

僕、こんな格好をさせられた上、笑われてる！？

「だいたい、会長はべつにテストの疲れなんて、ないんじゃないかなかったですっけ？」

「大して疲れていないと言っただけで、疲れがないとは言っていないな

い。それに、仮に疲れてなどいなくても、癒しというのは必要なものだ！」

「そうだよ、除夜ちゃん。……あたしも癒してもらってます。なむなむ」

ちまきはちまきで、なぜだか僕を拝むように両手を合わせている。

「いいではないか。てるてる坊主イベントの主役になれたのだから……鎧兜のときもそうでしたけど、だ〜れも注目なんてしてなさそうですけど？」

「ふむ。まあ、そういうこともある」

「うん、あるある！」

……このふたりには、僕がいかにも抵抗しようとも、まったく敵う気がしない。

抗えば抗うだけ、気力と体力の無駄遣いとなってしまう。

諦めの境地。もうこうなったら、僕にはふたりが満足するまで無抵抗に徹するしか、手は残っていないのだろう。

「あれ？ おとなしくなった？」

「ふむ。それはよかった。ふっふっふ、この前のイベントでは鎧兜で阻まれてできなかったからな、今度こそ……」

「そうですね！ 今度こそ、あんなことやこんなことを……！」

会長とちまきの、とても女の子とは思えない、いやらしい悪魔のような笑みが、僕の背筋を凍らせる。

とはいえ、てるてる坊主状態の僕に果たしてなにができればよいか？

否、なにもできはしまい。

諦めて、やりたいようにさせてやるしか……。

でも、このあいだの鎧兜のときにしようとしていたことって……。記憶をたどり、しっかりと思い出した。思い出しはした……。けど、抵抗するすべは……。ない……。かも……。

会長とちまきは、床の辺りにまで垂れ下がるシーツの裾の中へと手を滑り込ませ、そして……。

「ちょっと、会長！　もしかして、そっちが本当の目的だったんですか！？」

「ふっふっふ、騒ぐでない。おとなしくしていれば、すぐに終わる」「そうよ。除夜ちゃん的身體、あたしたちに委ねなさい」

「や……。やめてよ、ふたりとも！　あ……。ちょっと、待って、そこは、ダメ……。！　うわぁっ！」

……。それから僕がどうなったかは、皆様のご想像にお任せします……。

神龍学園に潜む黒い影……。

あれは幽霊か妖怪か、はたまた本当に死神なのか……？

次回、第七話、神龍学園死神物語。

……。会長、ほら、今あなたの後ろに……！

「てるてる坊主祭りでは、ほんと散々でしたよ」

今日も今日とて、ほぼ丸一日生徒会室で過ごした僕。

エアコムで見るだけの授業も終わり、放課後となっていた。

「私は楽しかったがな」

「あたしも〜！」

授業と掃除が終わると、ちまきも合流することが多い。

テスト期間中はほとんど来なくなっていたけど、テストが終わったあとは毎日とまではいかないけど、結構顔を出している気がする。

「堪能できたな」

「うんうん！」

「なに意気投合してるんですか！」

仲がいいのはべつに悪いことではないけど、僕をネタに悪人のような笑みを浮かべるふたりを見れば、反射的にツツコミを入れてしまうのも当然というものだろう。

「はっ、そうだった！ 柏葉ちまき、お前は私の敵だった！ とうか、自然と生徒会室に紛れ込むな！」

あ……いつもの会長に戻った。

最初の頃からこんなふうがちまきを怒鳴りつけるのが普通だったし、こっちはほうが、なんとなく落ち着く気がする。

だけど、ちまきのほうも扱いに慣れてきているのか、

「まあまあ、固いこと言いつこなしですよ！　これからもふたりで、除夜ちゃんをおもちやにして楽しみましょう！」  
「ふむ。まあ、それはそれでいいか」

と、会長は簡単に丸め込まれてしまった。

「よくないです！」

ふたりのおもちやにされかけている僕は、果たして今後、どうなってしまうのだろうか。

先行き不安だ。逃げ出したい……。

「逃げても地獄の底まで追いかけるぞ」

「うんうん！　骨までしゃぶり尽くすんだから！」  
「怖っ！」

「はっはっは、冗談に決まっているだろう！」

「そうそう！　やっぱり除夜ちゃんをからかうのって楽しいわ！」

「うむ。からかいがいのある反応だった」

「……そ、そうですね、冗談ですよ、あははは……」

まったく冗談とは思えなかったのだけど、とりあえず形だけでも笑顔を返しておく僕だった。

と、そのとき。

ガタッ……。

生徒会室の入り口のドア付近に、なにか物音が響く。

「む？」

「誰!？」

ちまきが素早くドアに駆け寄り、一気に開ける。  
ドアの向こうには、誰もいない。

「なんの音だったの？」

「……曲がり角のほうに、一瞬だけ黒っぽい人影みたいのが見えたとような気がする」

「黒っぽいということは、男子生徒か」

僕と会長もドアから廊下に顔を出して様子を探ってみるけど、すでに人影らしきものは見当たらなかった。

学園の制服は、女子生徒は薄い紫色、男子生徒は濃い灰色を基調としたブレザーになっている。

黒っぽい見えたということは、人影が生徒だったのであれば、男子生徒の可能性が高い。

「やだ、のぞき!？」

「……こんな場所をのぞいたって、意味ないんじゃない？」

胸の前で両手を交差し、怯える仕草をするちまきに、僕は率直な意見を述べる。

「あたしがいるじゃん！ こんな可愛い女の子がいるんだから、恥ずかしがり屋の男子生徒が我慢できずにのぞいちゃったとしてもおかしくないわ!」

「可愛い女の子?」

ドガッ。顔面に激痛。

「……除夜ちゃん、殴るわよ?」

「もう殴ってる……。しかも顔面グーパンチはやめて……」

「じゃあ、チヨキで目を……」

「それはもっとやめて……」

こんな凶暴女のくせに、どの口で可愛い女の子だなんて言うかな。といった言葉は、とりあえず飲み込んでおくとして。

「でも、のぞきだしたら、目当てはどっちかという会長じゃないかな？」

「ど……どうしてよ？」

「だって、スタイルが……」

一瞬でムツとなるちまき。いやまあ、それ以前から怒りの形相だったのは確かなのだけ。

「どうせあたしはスタイル悪いわよ！」

「……主におなかの肉が？ ……って、黙ってチヨキを準備するのはやめて！」

口は災いのもと。どうも僕って、余計なことを言ってしまう性質があるみたいだ。

自分でわかっていても、口に戸は立てられないのだけ。

「なぜ私などを見るのだ？ 見ても楽しくなかるっ？」

会長本人は首をかしげていたけど。

「会長さん、胸大きいですもんね、悔しいけど。ちょっとは分けてほしいわ……」

ちまきがため息まじりに、少々恨みのこもった言葉を漏らす。  
彼女の言うとおり、会長は胸が大きい。そりゃあもう、黙っていても、ドン！ と強烈に自己主張しているくらいに。  
両手に腰を当てて胸を張るポーズを取ることが多いというのも、その豊満さを強調する要因になっていると思うけど。

「胸か……。しかし、べつにこんなもの邪魔なだけだがな。重くて肩も凝るし」

「お……。大きい人はみんなそう言うのよ！」  
「あんたはまだいいじゃんか！」

突如、新たな声 耳に悪そうな甲高い声が響く。  
無理矢理反らしてもなお膨らみが微塵も感じられないストーンと切り立った崖のような残念な胸の子供っぽい女の子が、目の前で涙目になっている。

「……菱餅先輩、なぜここにいます？」

「スパイ……。じゃなくって！ たまたま通りかかったただけだよ！」  
うわ。バレバレ。

……スパイって……。なにを企てるんだろう、この人？

さっきの男子生徒らしき人影も、この人の差し金だったのかな……？

「ひ……。ひーちゃんは忙しいのだ！ さらばなのだ！」

僕たち三人にじーっと見つめられ、菱餅先輩は逃げるように去っていった。

「……ま、私たちも帰るか」

「そうですね」

菱餅先輩がおかしいのはいつものことだし、僕たちはべつに気にせず、そのまま家路に就くのだった。

僕と会長とちまき。

三人で並んで帰る通学路は、もうすっかり薄暗くなっていた。

毎日毎日、生徒会室でバカ話をしてから帰るせいで、こんなふう  
に遅くなることも多い。

ちまきは生徒会室に顔を出さない日もあるから、三人で帰るのは  
毎日というわけではないけど。

でも、こうやって一緒に帰るのが、僕にとっての日常となってい  
るように感じる。

会長は方向が違ったため途中で別れることになるから、ちまきがい  
ない日は、そこから僕ひとりでの帰り道となる。

そうになると、突然しーんと静まり返ってしまう。

もちろん、車が走る音だとかカラスの鳴き声だとか、雑音自体は  
聞こえてくる。

それでも、誰も僕のことを知らない世界の中にポツンと取り残さ  
れたような寂しさを感じてしまうのも、また事実。

そんなとき、うるさいという思いはあるものの、会長やちまきが  
僕にとつてとても大きな存在になっているのだと、改めて感じたり  
するのだけど……。

「会長さん、次はどんなイベントをしましょうか？」

「そうだな……。七月には七夕があるな。夏の定番、花火大会もし  
たいところだが、八月は夏休みだしな」

「だったら、花火大会も七月で！」

「うむ。それがよかるう」

「祇園祭も七月じゃなかったでしたっけ？」

「おお、そうだな。ここは京都ではないが、東京は東の京都。やっ  
ておくべきだな！」

「土用の丑の日もありますよ？」

「それはいいな。ウナギ祭りも決定だ！」

「飲めや歌えの大騒ぎですね！」

「うむ！」

……祭りのたびに、なにかしらの被害をこつむる僕にとっては地獄のごとき計画が、どうやら実行に移されようとしているようだ。  
た。

こんな帰り道なら、静かなほうがマシかも、と思わなくもない。

と、不意に。

ガサツ……。

背後から、なにか物音が……。

「だ……誰っ!?!」

ちまきが振り返って叫ぶ。でも耳を澄ましてみても、しーんと静  
まり返るのみ。

「……菱餅先輩……ではないですよね」

「ああ。あいつならば、気づかれたとわかった時点で飛び出してく  
て、『お姉様』などと言いつつ私に抱きついてくるだろう」

「……確かにそうですね」

会長が『お姉様』』と言って腰をくねくね揺らす仕草がなんだ  
かとっても新鮮だったけど、今はそんなことにツッコミを入れてい

る場合でもない。

「そういえば以前、会長に逆らったら知り合いの死神に頼んで消してもらうとかって言ってましたよね？　もしかして、その死神……だったりするんですか？」

言うておきながら、なにをバカなことを、というような否定が飛んでくるのを期待していた。

だけど会長の答えは、僕の期待をあっさりと裏切る。

「さあ、どうだろうな」

「……え？　どういうことですか？」

冷たい風が吹きすぎていく。

そう感じたのは、背筋の寒気のせいだろうか？

ちまきもぐつと息を呑み、僕の腕にそつと身を寄せながら、黙って会長の言葉に耳を傾けている。

「昔からなんだがな。私の帰り道に待ち構える不埒なやから……まあ、小学校の頃から学級委員長や生徒会長をやっていたから、いちやもんを吹っかけてくるやつらも多かったのだが、そんなとき、知らないうちに排除されていることがあってな」

「排除って……」

「うむ、まるでなにか人ではないものが私の敵を代わりに倒してくれたかのように、そういったやからが道に倒れていたのだ。私は救急車を呼んでやったのだが、待っているあいだに話を聞いてみると、急に具合が悪くなって倒れたといった感じだな。私に逆らうと死神が呪い殺しに来る、なんて噂が立ったこともあったくらいだ」

「怖いですよ……」

こんな話を聞いたからか、今もどこからか視線を感じるような気がして、意思とは関係なく小刻みに震え始める。

……ちまきが思いつきり強く腕をつかんでいるから、血の巡りが鈍くなってきたのも、その原因のひとつだったりするのだけど。

「……ちまき、よく今まで生きてたね」

「え？」

「だって、最近は打ち解けてるけど、最初の頃は毎日のように言い争いしてたよね？」

「……………」

僕の腕を握るちまきの手に、さらなる力がこもる。

これ以上強く握られると、腕がもぎ取られかねない。

「ちまきは仮にも女だからな」

「仮にもってなんですか……………」

文句を言いながらも、ちまきの声にはいつものような勢いはなかった。

「女は呪い殺されないらしい」

きつぱりとそう言いきる会長。その言葉で、僕の腕をつかむちまきの力が緩まって、僕としても少しはほっとしたのだけど。

それにしても、男性だけを呪い殺す死神……………？

いや、ちよっと待てよ。

「……………っていうか、男性にだって死者は出てないんですよね？」

死者が出ていたらもっと大きな問題になっていただろう。念のた

めに確認してみる。

「考えてみたら、そうだな」

……小さい頃からずっと、自分の周りでそんなことが起こっていたのに、なんて無頓着な……。  
とは思ったものの、この会長ならそんなもんか、と妙に納得でき  
てしまう。

「生徒会室に出たのぞきも、死神だったのかな……？」

腕に絡みつく力こそ緩まったものの、ちまきは相変わらずガタガ  
タと震えている。

死神なのか、単なるのぞきなのか、それとも菱餅先輩の差し金な  
のか、はたまたもつと別の超常的ななにかなのか。

それはわからなかったけど、これは僕の身に降りかかってくる不  
思議な出来事の、ほんの序章にしかすぎなかった。

それから僕の周りで、なにやら不可解な現象が起こり始めた。

ふと耳もとでなにやら声が聞こえたけど、周囲を見回しても誰もいなかったりとか。

ふと目の前を、黒い影のようなものが通り抜けていったりとか。

ふと鼻先を、なにかが焼かれるような焦げ臭いにおいがかすめていたりとか。

ふと首すじになにか冷たいものが触れたような感じを受けたけど、振り返ってもやっぱりなにもなかったりとか。

「こんなことが、頻繁に起こるようになってるんですよ」

いつもどおりの生徒会室で、僕は会長とちまきに、そう打ち明けた。

「なるほど。だから除夜は、たまにきよきよると周りを見回したりしていたわけか」

「除夜ちゃんの場合、挙動不審なのは普段からだけどね！」

……なぜだか、両手で丸を作り頭のとっぺんに指先を当てる、いわゆるお猿のポーズをしているちまきにこそ、そう言ってやりたい。

「このポーズは、おまじないなのよ！」

「おまじないって、なんの？」

「……それは……秘密よ！」

ちまきは赤くなりながら、お猿のポーズのまま体を左右に揺らす。

おまじないにしたって、すごく変だ。

と、そんなことよりも、僕の周りで起こっている現象について考えないと。

相談する相手として、このふたりしか選択肢がない僕の現状って、どうにかすべきなのかもしれないけど。

そんなことを思ったりしつつも、僕は「どう思います?」と尋ねてみた。

「菱餅が暗躍しているというわけではないのか?」

「そういつわけではないと思いますけど……」

先日、菱餅先輩が思いっきり口にしていた、スパイという言葉…

…。  
「ここそと僕や会長の様子を探っているというのは考えられる」とだ。

ただ、今回の件は、おそらく彼女の仕業ではないだろう。

「あの先輩だったら、絶対なにかしら失敗して、尻尾をつかむことができそうだと思いますし」

「ふむ。鋭い考察眼だな。私もそう思うぞ」

こんな言われ方をする菱餅先輩って……。

「うん、そうね。菱餅先輩ではないわ」

「……どうして、ちまきが断言できるの?」

「ふえっ!? あゝ、えゝっと、勘よ勘!」

「?????」

ちまきの様子が、なんだかおかしいような気もするけど……。

そんなことより、もっと気になる現象が僕の背中辺りで起こり始める。

うぞうぞうぞ……。

なにかが背中を這うような、気持ちの悪い感触……。

「うわっ!?!」

僕は驚いて振り返ってみるけど、背後には誰もいない。

「どっしたのだ?」「どっしたの? 除夜ちゃん」

心配顔のふたり。

「今、感じたんです」

僕は冷や汗を垂らし、視線を周囲に配りながら、小さくつぶやいた。

「こんなところで……なんとハレンチな!」

「いや、そういうことじゃなくて!」

「え? なになに? そういうことって、どっいうことお?」

ニヤニヤ笑いながら言葉攻めしてくるちまき。ふたりとも、わかっ  
つてて言ってるな?

「今回は、背中を毛虫かなにかが這うような感触だった……」

「うひゃうっ!」

僕がそう言うと、ちまきが必要以上に反応する。

「ちょっと、やめてよ！ あたし、虫とか苦手なんだから！ ああ  
ああ、聞いたらなんだか、背中がかゆくなってきたかも！ 気持ち  
悪い！」

「それは気のせいだと思うよ」

ちまきの虫嫌いは昔からだ。でも、僕はすっかり忘れていた。  
だから決して、仕返しのために意地悪であんなことを言ったとい  
うわけではない。

「だが、まだ気持ち悪いようなら、私が背中をかいてやる。……  
肉ごと削ぎ落とすかもしれないがな」

「毛虫がくっついてるくらいだったら、そのほうがいいかも……！」  
「いやいやいや、冷静になろうよ、ちまき」

話はすぐに脱線する。

このメンバーでは、ある意味それは必然であり自然の摂理であり  
抗うことのできない真理でもあると言えるのかもしれないけど。

僕は果敢に、軌道修正を試みる。

「毛虫の話は置いて、ふたりとも、どう思う？」

「そうだな……。極彩色の毛虫だったりすると、毒を持っていたり  
するかもしれないから危険だな」

「うわあ~~~~ん！ 毛虫イヤ~~~~！」

……まったく軌道修正できなかった。

会長が毛虫話でちまきをからかうのに飽き、ちまき自身も落ち着くまで待つてから、話の軌道はようやく戻された。

「学校といえは、幽霊話とかがつきものよね！　これは幽霊の仕業に違いないわ！」

毛虫の件で泣き叫んでいたことなど、すっぱりと忘れ去ったかのような満面の笑みで、大声を張り上げるちまき。

そんなに幽霊に出てきてほしいのだろうか。

それに、学校といえは学校霊などというベタな発想でいいのだろうか、と思う部分もあったものの、

「妖怪っていう可能性もあるよ？」

「いや、死神だろう」

続けて放たれた僕と会長の意見も、ちまきと大差ない、微妙なものだったりして……。

そんな意見の中で考えてみれば、会長が以前から話していた死神だというのが、一番しっくりくる説明のように思えた。

「だけど、どうして僕が狙われるのかな？　会長の敵ってわけじゃないよ？」

「むしろ味方よね？　補佐としていろいろと手伝ってるんだから」

うん。

柄にもなく熟考に入る面々。知恵熱が出そうだ。

「考えていても埒が明かないな。ここはひとつ、こんな作戦を立ててみるか」

「……」

会議テーブルに前のめりになり、顔を寄せ合って会長の作戦とやらを聞く。

そんなわけで、僕たちは密かにその作戦を決行することになった。

作戦といっても、実のところ全然大したことはない。  
というか、作戦にすらなっていないかもしれない。

これまで、僕に不可解な現象が起こったとき、そばには必ず会長  
やちまきがいた。

会長の補佐として生徒会室での授業を余儀なくされているため、  
家を出て学園に向かってから放課後になって家に帰るまで、僕は会  
長やちまきのどちらかと一緒にいる場合がほとんどなのだ。

教室を移動して行う音楽や美術などといった授業や、校庭か体育  
館で行われる体育の授業なんかは、さすがに生徒会室で受けるわけ  
にもいかないから、クラスのメンバーと合流しているわけだけだ。

その場合でも、クラスにはちまきがいる。

会長がいないのをいいことに、ここぞとばかりにベタベタくっつ  
いてくるから、暑苦しくてたまらないのだけだ。

体育の時間ですら、男女別々の授業だというのに隙を見て近寄っ  
てくる始末。そのたびに先生に怒られているちまきの姿にも、そろ  
そろ慣れてしまっているくらい。

ともかく僕の学園生活には、会長かちまきがつきものとなってい  
るのだ。……憑きものとも言えるけど。

そんなわけで、放課後、普段ならふたりと一緒にいる時間に僕は  
ひとりになって、生徒会の仕事を装って廊下を歩く。

そして会長とちまきは別の場所で隠れて様子をうかがう、という  
作戦を取ることにしたのだ。

本当に幽霊だったりしたら目に見えない可能性もあるけど、とり

あえずは現場を押さえるのが先決。

「エアコムで写真や動画を撮影しながら隠れて見張っておくから、なるべく自然に廊下を歩いていけ」

会長からはそんなふうに指示されている。

ちらちら視線を向けてみると、曲がり角の陰から、ずっとこちらにエアコムを装着した利き腕を向けているふたりの姿が見え隠れしていた。

どうやら、写真や動画を撮りまくっている様子がうかがえるのだが、とくに不可解な現象が起こっているわけでもないときに撮影して、なにか意味があるのだろうか？

それに、こんな作戦で本当に大丈夫なのか、という不安もある。相手が幽霊だか妖怪だか死神だかわからないけど、隠れている會長やちまきのほうが鉢合わせしてしまう可能性だってありそうな気もするし……。

「あ~~~~~！ あんた誰よ!？」

僕がそんなことを考えた刹那、ちまきの大声が響き渡った。

ダダダダダダ！

逃げる足音。

「ちょっと、待ちなさい！」

ちまきの制止する声に、当然ながら従うはずもない。

僕の予感も、どうやら的中してしまったようだ。

とはいえ、作戦としては失敗とは言えないのかもしれない。

なぜなら、逃げる足音が僕のほうへと向かってきていたからだ。

ちまきに追い立てられるように曲がり角の陰から飛び出してきたのは、黒いローブに身を包んだ人影。

フードを深くかぶっているので顔はわからないけど、足はあるように見える。

というか……完全に僕のほうに突撃してきてる!?

「う……わあ~~~~っ!?!」

そして……ぶつかる。

どうしてまっすぐ走ってきて、僕に激突したのか。

それは、フードのせいで前が見えなかったからのようだ。

ともかく、僕の体が障害物となり、ローブの人影は勢い余ってその場に倒れ込んでしまった。

そのあいだに、ちまきと会長も駆け寄ってくる。

「顔を見せなさい!」

ちまきが黒いフードを剥ぎ取ると、長い前髪で片目を隠した男性の顔があらわになる。

それを見て、会長がひと言、つぶやきを漏らした。

「お前は、じょうたろう浄太郎……」

「こいつは、心見浄太郎。心を見ると書いて、『うらみ』と読む、変わった名字のヤツだ。そして、幼馴染みでクラスメイトでもある」

黒いローブの男性を生徒会室へと半ば強引に連れ込み、僕たちが説明を求めると、本人ではなく会長が代わりにそう答えた。

「会長のクラスメイトということは、先輩なんですね。どうしてそんなローブなんて着てるんですか？」

「こいつはオカルト研の部長だからだ」

僕の問いに再び答えたのは、やっぱり本人ではなく、会長だった。

「会長、幼馴染みでよく知ってる仲間なんですけど、心見先輩のほうに訊いてるんですから、勝手に答えないでください！」

「む……しかしだな、こいつは昔からはっきりしないヤツで、私がないとなにもできないような男なのだ」

「そうなんですか……？」

心見先輩に視線を向けながら質問すると、こくこくと無言の肯定が返された。

「だけど、さっきはあんな場所で、いったいなにしてたんですか？」

「……我は小さな頃から、桜蘭のことだけを見守ってきた……」

ちまきの言葉に控えめに答える心見先輩。

黒いローブと片目を隠すほど長い黒髪のイメージからは想像もつかない渋くてカッコいい声だ。

よく見れば顔もかなり整っているようだし、喋り方さえしっかりすれば、実はモテモテになってしまつのではなからうか。

……なんだかちょっとシヤクだし、これは黙っておくことにしよう。

それはともかく、心見先輩の言葉を聞いたちまきと会長は、

「ストーカーね」「ストーカーだな」

と、心見先輩に白い目を向ける。

確かにそう言われても仕方ないとは思うけど……。

でも、心見先輩の目を見ればわかる。

さつきからチラチラと会長に視線を向けては、微かに頬を染めて目を逸らしている。

それに、小さな頃からずっと見守ってきたということ、会長を「桜蘭」と下の名前で呼んでいることを総合的に考えてみれば、おのずと答えは出る。

この人、会長のことが好きなんだ。

「まったくお前は昔から。どうしてそんなに、私につきまとうんだ？」

「……それは……」

本人は全然気づいていないようだけど。

なんというか、前途多難どころか、前途に道無し、といった感じ。

「反省しなさい、このストーカー男！」

先輩相手でも容赦のないちまきは、心見先輩を正座させてお説教モード。

「……はい、すみませんでした……」

心見先輩は、逆らわないほうがいいと判断したのだろう、素直に謝罪の言葉を口にしていった。

「あれ？ でもそうすると、僕の周りの不可解な現象って、心見先輩の仕業ってこと？」

「浄太郎、どうなんだ？」

僕が疑問の声を漏らすと、素直に答えるよう会長が心見先輩を促した。

「……我が、呪いでやった……。儀式で呼び出した幽霊や妖怪や死神に命令して……」

……。

「ちょっと！ 本当に幽霊やら妖怪やら死神やらだったわけ!？」

「僕、もしかして本当に殺されそうになってたとか!？」

パニック状態のちまきと僕。

だけど、会長は落ち着いていた。

「大丈夫だ。いくら呼び出した幽霊やらに命令してやってもらうとはいえ、浄太郎に人を殺すような度胸などあるはずがない」

こくこく。頷く心見先輩。

「……我は、脅すつもりだった……。補佐となつてずっと桜蘭のそばにいる、お前を……」

恨みがましい瞳を向けながら、心見先輩は僕に怒りのこもった言葉をぶつける。  
なるほど……。

「安心してください、心見先輩。僕は会長のことなんて、なんとも思つてませんから」

僕は心見先輩に耳打ちする。

これで、納得してくれるはずだ。そう思ったのだけど。

「……だが、ずっとそばにいたら心変わりするかもしれない……。近づかせないのが一番の得策……」

「大丈夫ですつてば。だからもう、僕に幽霊や妖怪や死神をけしめないでください」

「……わかつた。だが、もしその言葉が嘘だったら、そのときは私も覚悟を決める……。息の根を止める命令を下す覚悟を……」  
「やめてください!」

とりあえずこれで、完全に危険がなくなったわけではないものの、心見先輩を納得させることには成功したようだ。

「なにをこそこそ話してるんだ?」

「い……いえ、なんでもありません!」

会長が訝しげに問いかけてくる。

僕は慌てながら、なるべく視線も合わせないようにして答えた。

……今後、会長と会話するときには、心見先輩に誤解されないよう注意する必要があるのかもしれない。

以前会長が話していた、いちゃもんをふっかけてくるような不穏なやからが道に倒れていたというのも、おそらく心見先輩の仕業だったのだろう。

正確には、会長を守るために心見先輩がけしかけた幽霊やら妖怪やら死神やらの仕業、ということになると思うけど。

「それにしても、オカルト研究会なんてあったんですね、この学園あたし、知りませんでした」

ちまきの言うとおり、僕も知らなかった。マイナーな同好会なんて、たくさんありそうではあるけど。

「オカルト研は研究会ではなく、オカルト研究部として認められているぞ？ もっとも、部員は浄太郎ひとりだけだが」

「え……？」

会長の言葉が、一瞬僕にはよくわからなかった。

それなりの人数がいるのに部として認められていない同好会も、中にはあったと思うけど……。

僕の疑問は、ちまきが代弁してくれた。

「同好会ならともかく、部活動って確か生徒会長の承認も必要でしたよね？ 部費も出るはずだし。会長さん、どうしてたったひとりしかないのに部として認めてるんですか？」

「そりゃあ、幼馴染みのよしみってやつだな。怪しい部活だとは思

うが、浄太郎の唯一の趣味を奪うわけにもいかないだろう。オカルトの儀式には金もかかるようだし、部費はほしいだろうと考えてな」

「……………桜蘭、優しい……………」(ぼっ)

会長つて、身内とか近い相手にはとくに甘いようだ。

まあ、補佐になって毎日一緒に過ごしている中で、なんとなく感じていたことではあるけど。

だけど、だからこそ、心見先輩は会長を好きになっていったんだろうな。

冷たくあしらわれることもあるけど、面倒見もよくて優しくしてくれて……………。

「アメとムチ？」

ぼそつとつぶやいた僕に、

「……………実際にムチで叩かれたこともある……………」

心見先輩は小さな声で答えた。

「……………それはそれで、快感……………」(ぼっ)

……………どうやら完全に調教しつくされているらしい。

おそらくは小さな頃の出来事だろうけど、どんな関係だったのやら。

僕は……………あまり深く考えないことにした。

あのとつてもつるさい女の子、菱餅先輩が再びデュエルを申し込んできた！

はぁ……、やっぱり今回も僕が戦うことになるのかな……。

次回、第八話、菱餅の挑戦、再び！

……え？ ちまき、どうしたの？ そんな……制服を脱ぐなんて……！

このところ、ちまきの様子が少しおかしい。

幼馴染みで小さな頃からずっとしつこくつきまどってきた、あのちまきが。

最近は生徒会室にすることが多いせいで、一緒にいる時間が減ったのは事実だけど。

それだけじゃなく、放課後になって生徒会室に押しかけてくる頻度も少し減ったような気がする。

生徒会室に来たとしても、先に帰ってしまうことも多い。

家が隣同士だから朝は一緒に登校しているけど、並んで歩いていても、あまり話しかけてこない。

もともと僕は聞き役に徹することが多い身。だから黙って静かに歩いて登校、そして下駄箱で上履きに履き替えたら軽く挨拶だけして別れる。

そんな日が多くなっていた。

帰り道でも、なるべく一緒に帰ろうとしていた入学当初とは違って、会長とふたりだけの場合が増えている。

そうになると、会長の家は方向が違ったため、途中からはたったひとりでの帰路となる。

今日は会長が早めに補佐の仕事から解放してくれたおかげで、まだ明るい時間。

夕焼けのオレンジ色がやけに目に染みる。

カラスの鳴き声がやけに心に染みる。

前にも思ったことだけど、やっぱりちょっと、寂しい。

僕にとって、ちまきっていったい、どういう存在なのだろう。  
単なるお隣さんで幼馴染みの女の子……。  
それだけではないだろう。

ずっと同じ学校に通うクラスメイトの女の子……。  
これだけでもない。

しつこくつきまってくる、うるさいだけの女の子……。  
それは違うな……。だって僕は、ちまきがベタベタくっついてく  
るのを嫌だなんて思っていないのだから。

だとしたら……。

恋しい人……？

ん〜、それもなんか違うような……。

でも僕はずっとちまきと一緒にだったからか、恋なんてしたことも  
ない。

僕が女の子のほうを見ていたり仲よく喋っていたりすると、ちま  
きが怒り出してしまうから、ちまき以外の女の子と長い時間一緒に  
いるなんて、この学園に入学するまで一度もなかった。

今は会長と一緒に時間が長いけど、補佐としての務めで強制収容  
みたいなものだし、色恋沙汰とは無縁だ。

「除夜ちゃんは、あたしのものよ!」

会長との言い争いで、ちまきはよくそんなことを言っている。ち  
まきにとっての僕は、単なる所有物なのだろう。

幼い頃からずっと一緒にいたことで、ちょっと気弱な僕を弟のよ  
うに感じて、守ろうとしてくれていたのかもしれない。

それじゃあ……。

僕にとって、ちまきっていったい、どういう存在なのだろう。

姉のような存在というのは、また違う気がする。

いくら自問しても、正しい答えは導き出せそうもなかった。

そんな日々が続いた、ある昼休み。僕は会長とともに、学食へと向かっていた。

ほとんどの時間を生徒会室で過ごす僕たちだけど、移動教室の授業や体育などの他、こうして食事のために出歩くことだってある。

と、昼休みの雑然とした騒がしい廊下で、不意に聞き慣れた声が耳に入ってきた。

それは、ちまきの声だった。

周りの喧騒と比べたら、とても小さい声ではあった。

だけど、幼馴染みでほとんどずっと一緒に過ごしてきた僕には、一瞬で聞き分けられる能力が備わっているようだ。

「ん？ どうした？」

「いえ……今、ちまきの声が……。あつ、いた」

僕がきよろきよろと見回すと、なぜか階段下の薄暗いスペースという普段ならほとんど人が立ち入らない場所に、ちまきの姿を発見した。

階段は廊下から少し奥まった位置にあり、その階段からさらに奥

側となる空間は、ぱつと見では誰かがそこにいるなんて考えつかないような場所。

ちまきの声に気づいていなければ、僕にだって見つけれなかったに違いない。

ちまきはそこで誰かと話しているようだ。

その相手が男子生徒だったりしたら、ちょっとだけショックかもしれないところだけ。

……あれ？ でも、どうしてショックだと思うのだろうか？

「もうひとり、菱餅だな」

思考が別のほうに飛びかけていたのを、会長の声が引き戻す。そう。

ちまきと話している相手は、その言葉どおり、菱餅先輩だった。

「どうしてこんなところで、しかも小声でひそひそと話してるんでしょうか……」

「まあ、どうでもいいだろう」

会長はどうやら興味がないらしく、ピシヤリと言い捨てる。

「……菱餅先輩は会長のクラスメイトで、しかも会長にベタ惚れなのに、そんな無関心でいいんですか？」

「なにを言っている。あいつは女だぞ？」

「ん〜と、なんとというか、百合的な意味合いというか……」

「綺麗な花だよな、百合。私は好きだぞ」

「いや、そうではなくて……」

会話がまったく噛み合わない。さすがは会長だ。

おっと、いけない。

そんなことより、ちまきの様子を見ないと。

と考えて視線を戻してみると、すでに階段下のスペースはもぬけの殻。

ちまきと菱餅先輩の姿は、どこにも見当たらなくなっていた。

気づかれたのか、単に話し終えて階段を上っていったのか……。

「ちまきと菱餅、いなくなってるな。ま、私たちには関係のないことだ。それよりも早く学食に行くぞ」

「はい、わかりました」

気にはなっていたけど、会長にこう言われたら従わざるを得ない。

僕は素直に頷き、再び歩き始めた。

そのすぐあとだった。

菱餅先輩が、生徒会戦拳のデュエルを再度申請してきたのは。

菱餅先輩からのデュエル申請の報告が、僕と会長のエアコムに送信されてきた。

申請されたのは今日の昼休みの終わり。日時は一週間後の放課後となっていた。

その他に特記事項もある。

どうやら申請した菱餅先輩のほうから、時間も指定されているようだ。

「今回は時間指定か。菱餅のやつ、なにか企んでるな」

会長がつぶやく。

その顔は言葉とは裏腹に穏やかだ。菱餅先輩相手に、負けるはずはないと考えているのだろう。

……でも戦うのって、僕だと思っただけだ。

それにしても、なぜ菱餅先輩はこんな時間を指定してきたのか。

指定された時間は夕方六時半。そろそろ七月になるとはいえ、薄暗くなり始める時刻。

晴れていればまだ夕焼けで明るいだろうけど、その時間集まるというだけで実際のデュエル開始はもう少し遅くにずれ込むはず。とすると、日が落ちてからの戦いになる可能性も高い。

さらには、場所も指定されていた。

「場所は体育館か。校庭では暗くなっているだろうし、そのほうが

「無難とも言えるか」

会長はデータに目を通し、そう分析する。ただ、デュエル時に展開される擬似空間は周囲が暗くても見えるようになっていた。だから校庭でも問題はないはずなのだ。

それなのに体育館で、遅い時間を指定……。僕はなにか引つかかる感じを覚えた。

すでに放課後となっていたけど、今日もちまきはこの生徒会室に顔を出していない。

昼休みにちまきと菱餅先輩がこそそと話していたのを目撃したことが思い出される。

「それにしても、せっかくのイベントだというのに、こんな遅い時間からでは観衆が少なくなりそうだな」

「……べつに楽しむようなイベントじゃないですよ。負けたら会長の座から引きずり下ろされるわけです」

楽観的な会長に、僕はため息まじりで進言する。

「ま、今回も頼むぞ、除夜」

「はいはい、わかっています」

言われるまでもなく、わかりきってはいたけど、やっぱり今回も実際に戦うのは僕のようなのだ。

前回の戦いでは、デュエルには勝ったものの悪者にされてしまった感があった。でも、はつきり言って菱餅先輩は弱い。

小さな体で体力もなく運動音痴で、会長から聞く限り成績もかな

り悪いらしい。

もちろん、デュエルの精神体の能力に影響するのは、運動能力と学習能力だけではないのだけど。

そうだとしても、重要な要素となっているのは確かだろう。だから、弱い。とてつもなく、弱い。

前回、連続したパンチの中でみぞおちに重い打撃を加えられてしまったのは、僕が完全に油断していたからだ。

そういった卑怯な手段も使ってくると知っている以上、同じ手は通用しない。それは菱餅先輩にだってわかっていているだろう。

それなのに再挑戦してくるからには、勝つための秘訣や作戦なんかを準備しているに違いない。

確実に勝てる、とまで思っているかどうかはわからないけど、警戒しておくに越したことはない。

なにせ生徒会戦拳は、負けたら生徒会長が交代する重要な戦いなのだから。

こちら側からしてみれば、勝てば生徒会長を続けられるという利点しかない戦い。

すなわち勝って現状維持。デュエルを受けるメリットなど、まったくくないと言っている。

とはいえ、生徒会戦拳のデュエル申請があつた場合、拒否はできない決まりになっている。

嫌々でも戦うしかないのだ。

「除夜、どうした？ 自信がないのか？」

僕が考え込んでいるのを見て取つたのだろう、会長が声をかけて

きた。

会長としては、すべてを僕に委ねていることになる。僕が負けたら、生徒会長の座から退かなくてはならないのだから。

そつだ。僕が弱気になっていてはダメだ。

だいたい、相手が菱餅先輩なら一度戦っているわけだし、僕としても安心できる。

「いえ、大丈夫です。なにを考えて再挑戦なんてしてきたのかわかりませんが、相手の特徴も熟知しているわけですし、楽勝ですよ！……たぶん」

最後に弱気が出てしまったけど、僕の言葉に会長は満足そうな頷きを返してくれた。

「頑張れよ、除夜。くれぐれも当日、体調を崩したりなんてしないようにな」

「はい」

会長、僕の体調まで気遣ってくれて……。じーんと胸が熱くなる。

「お前がいなかったら、私が戦うしかなくなる。それは面倒だからな」

……そつだった。会長はこういう人だった。

真面目そつで凜々しい綺麗な顔立ちをしていて、穏やかで温かい声だから、キラキラした瞳で見つめられながら言葉をかけられると、ついつい誤解してしまう。

だけど……。

おそらく、僕の身を案じてくれているのは本当だ。  
恥ずかしいからこんな言い方をしているけど、会長の言葉には温  
かさが感じられた。

だからこそ信じてしまう、というのもあるのだろう。  
そしてそれは、僕だけではない。他の生徒たちも同じなのだ。

いきなり突拍子もないことを言い出して実行に移してしまうよう  
なこんな会長だけど、意外にみんな、慕っているように思える。

生徒会戦拳のデュエルで勝てば、いつでも会長の座から引きずり  
下ろすことができる。

だけど、デュエルを申請する人は、思いのほか少ない。

最初に戦った総合格闘技部の部長さんが、どういう理由でデュエ  
ルを申請したのかは知らないけど。

前回の菱餅先輩の場合は、会長の不信任ではなく先輩にとって僕  
の存在が邪魔だから、という理由だった。

今回も前回同様、自分が生徒会長となって、サクラン先輩を補佐  
にする狙いでの再挑戦なのだろう。

とすると、会長が会長でいることを不満に思っている生徒なんて、  
今の学園には誰もいないのかもしれない。

無理矢理補佐に任命されて、いろいろと雑用までやらされている  
僕にしたって、今の生活にさほど不満があるわけじゃないし。

やりたい放題できる生徒会長という役職。それは考えてみれば、  
すべてが自分の責任になるということでもある。

会長自身はそんなことをまったく感じさせないけど、相当な重圧  
があるはずだ。

だけどそれでも生徒会長を続けている。

楽をしたい、なんて言うてはいたけど、実際、言うほど楽ではないはずなのだ。

なんだかんだ言っても、人望が厚い人なのは確かなのだろう。だから、みんながついてくる。

菱餅先輩や心見先輩にしたって、会長に好意を寄せているのは、会長の内面的な魅力に惹かれた結果だとも言える。

僕は……会長の補佐になって、よかったのかもしれない。  
ふっと、頬が緩む。

「ん？ どうした？ いきなりニヤけて、気持ち悪いな。それより洗濯物がたまってたてるから頼むぞ。それと生徒会室の掃除もな」

僕は……会長の補佐になって、よかった……のかな……？  
思いは揺らぐ。だけど。

「はい、わかりました」

素直に従う自分がいた。

……やばい、もしかして僕って、心見先輩と同じように、会長に調教されて飼いやられてる状態なのかも？

怖い考えが頭をよぎるけど、僕はそれを振り払って、生徒会室に散らばっている洗濯物を拾い集めるのだった。

デュエル当日の放課後。僕はいつものように会長と生徒会室にいた。

「こんちわっすー！」

突然、なんだかやけに明るい声を伴って、ちまきが生徒会室へと入ってくる。

「あっ、ちまき。ここに来るのは、ちょっと久しぶりだね」

「うん……えっと、寂しかった？」

「え？ べつに……」

「……………」

いきなり不機嫌にさせてしまった。

「そ……それより、今日はどうしたの？」

「部外者が勝手に入ってきては困るのだが」

ちまきの機嫌がこれ以上悪くならないようにと、話題を逸らす作戦に出た僕だけど、会長が横から会話に割り込んできた。

なんとというか、会長も少々不機嫌な様子。

六時半からデュエルがあるわけだし、気分的に張り詰めているだけかもしれないけど。……って、そんな繊細な人でもないか。

ともかく、その会長の言葉で、ちまきの機嫌は結局悪くなってしまった。

「いいじゃないですか、少しくらい！ それに今日は、除夜ちゃん

に大切な用事があるんです！」

会長を睨みつけた上、言葉でも噛みつくちまき。いつもにも増して強気だ。

相手が先輩であり生徒会長であっても関係なし。……それは、いつものことか。

「ですから除夜ちゃんを借りていきます！ いつも除夜ちゃんを独り占めしてるんですから、それくらいいいですよね？」

普段から強気ではあるけど、今日のちまきからは、なんだか気合のようなものまで感じる。

その勢いに圧されたのだろうか、会長は素直に頷く。

「ああ……わかった。だが、今日の夕方にはデュエルがある。それまでに返してくれよ？」

ニュアンス的に「帰して」ではなく「返して」なのが、物扱いされているのを物語っている。

「わかってますよ。それじゃあ、除夜ちゃん、ちょっとついてきて」「うん、わかった」

大切な用事ってなんだろう？  
そう思いながらも、僕は頷く。とりあえず、ついていけばわかるはずだ。

「それじゃあ、行ってきます」  
「ああ」

僕はこうして、生徒会室から連れ出された。

ちまきは、黙って僕の前を歩く。どうやら下駄箱に向かっていくようだ。

とすると、目的地は外。

でも、外は雨が降っていた。薄暗いとは思っていたけど、いつの間降り出したのだろうか。

考えてみたら、僕は傘を持ってきていなかった。

天気予報では、降水確率が低かったのに……。ちまきも見限り、傘を持っているようには思えない。

ちまきはなにも言わず、靴に履き替え、出口へと歩いていく。僕もそれに続く。

雨は、結構強い。

にもかかわらず、ちまきはそのまま外へと身を躍らせる。

「ちまき、濡れちゃうよ？ 僕も傘持ってきてないけど、なにか代わりのものとか、誰かに借りるとか……」

「いいから、早くついてきて」

問答無用でピシヤリと僕の言葉を遮る。

逆らったらあとが怖い。それは幼馴染みで長いつき合いの僕にはよくわかっている。ここは素直に従うしかない。

黙って歩き出すちまきを追いかけて、僕も雨の中に飛び出した。

ちまきの目的地は、校庭の一角にある体育倉庫だった。雨が激しいためか、校庭には部活動をしている生徒の姿もほとんど見えない。

「ねえ、ちまき。こんなところに連れてきて、どうしたの？ それに、雨に濡れて寒くない？ 僕、寒いんだけど……」

「いいから、入ってきて」

「うん……それじゃあ、お邪魔します……」

体育倉庫に入るだけなのに、なんとなくそんな言葉をこぼしながら、ちまきの背中を追う。

微かにカビ臭い体育倉庫。

雨雲が空を覆い尽くしているため、薄暗いを通り越して、かなりの暗さと言ってもいい。

その体育倉庫の一番奥まで歩み進んだちまきは、ゆっくりと僕のほうへと振り向く。

雨に濡れてここまで来た僕たち。

僕はいいとして、ちまきはこれでも女の子だから、問題なんじゃないだろうか。

暗いからよく見えはしないけど、ブレザーの下のブラウスだって濡れているに違いない。とすると、下着が透けていたりとか……。

僕のほうは、ちまきが相手ならべつに変な気分になんてならないと思うけど、ちまきのほうは恥ずかしくないのかな……。

と、そのとき。

突然体育倉庫の重い金属製のドアが閉められた。

「あ……」

僕は振り返ってドアのほうに視線を向ける。

ガチャガチャと音がして、そして雨の中だというのに駆け足で遠ざかっていく足音……。これってもしかして……。

僕はドアに駆け寄り、横に引いて開けようと試みる。

でも思ったとおり、びくともしない。カギがかけられ、中に閉じ込められてしまったのだ！

倉庫の奥には明り取りの窓があるものの、高い位置にある上、サイズのにも小さいため、人が出入りできるような余裕はない。

真っ暗ではないにしても、いつそう暗くなってしまった体育倉庫内。

そこに今、僕とちまきは、ふたりきりで閉じ込められてしまった。

「そつだ、エアコムで会長に連絡……」

僕はエアコムのウィンドウを開く。でも……。

「え？ 電波停止中……？」

どういうことだろう？

そんな連絡、なかったと思うけど……。

エアコムは生活にも直結しているツールだ。

ギヤラクシーのシステム側でメンテナンスすることはあっても、

問題にならないように機能ごとに行われるし、一週間以上前に告知することも徹底されているはずだ。

僕はそんな告知なんて、まったく聞いていなかった。にもかかわらず停止中だなんて。

「いったいこれは、どうなっているのだろうか……」。

「ちまき、どうしよう?」

慌てている僕とは対照的に、ちまきは落ち着いていた。

いつもだったら、僕より先にパニックになっていてもおかしくないのに。

「除夜ちゃん……。ゆっくり、お話できるよ」

「……そういえば、ちまきと最近、ゆっくり話してなかったね」

慌てても仕方がない。そう考えているのだろうか。

ちまきの穏やかな口調に、僕も少しは頭を冷やすことができた。

こちらから連絡できなくなつて、会長が探してくれるはずだ。今日はデュエルもあるわけだし。

せっかくだから今は、久しぶりに訪れたふたりきりでの会話の時間を大切にしよう。

僕はそう考えた。

畳まれた状態で置いてあったマットに、僕は腰を下ろす。

そのすぐ横に、ちまきも座った。

「最近ちまき、朝一緒に登校してても、あまり喋らないよね。下校のときは、いないことも多かったし」

そう言つと、ちまきは彼女らしくなく、両手を体の前辺りで組んで、なんだかもじもじし始めた。

「それは……その……」

「どうしたの？」

恥ずかしがっているのはわかった。

でも、不思議とそれほど嫌がつているようには思えなかった。だから僕は、しつこく聞き出してみることにした。

ちまきは、すぐに白状してくれた。

「実は、会長さんのことでイライラして、食べ過ぎちゃったの。おなかポッコリだったのよ……。だからダイエット成功するまで、おなかを見られなくなかったの。でも、まだ完全にダイエットできてないけど……」

「そうだったんだ……。でも、ここ数日はちよつとご無沙汰だったけど、生徒会室には結構顔を出したりしてたよね？」

「そ……そりゃ、ちよつとでも除夜ちゃんに会いたいし……」（ぼそぼそ）

僕の質問に、ちまきはなにやらぼそぼそと小声で言い始めた。よく聞こえなかったけど……。

「え？」

「いや、えつと、生徒会室なら椅子に座っちゃえば、おなかを見られたりしないから！ だからよ、うん！」

「ふん、でも、そんなの気にすることないのに」

「除夜ちゃん……」

頬を染めるちまき。そして……。

「あ……雨に濡れたから……制服、脱ぐわね……」

「え……ええええっ!? いきなり、なに言ってるの!? 露出狂!?」

「ちやうわ! と……とにかく、脱ぐから……。あ、でも、こっちは見ないで……」

「うん……」

しゅるしゅると衣擦れの音が暗い体育倉庫に響く。

その音を聞く限り、どうやらブレザーだけではなく、その下のブラウスも、そしてスカートまでも脱いでいるように思う。

……ってことは、今のちまきつてもしかして、下着姿……?」

衣擦れの音が聞こえなくなると、今度は、ぴちゃっ、とか、そういった感じの水音が微かに響き始めた。

体育倉庫の雨漏りの音……というわけではない。

音は僕のすぐそばから聞こえていた。

暗くてよくは見えないけど、ちまきの癖が出て、ひと房だけ伸ばしている前髪をくわえて吸っている音なのだろう。

暗がりでもぴちゃぴちゃと音がしているのは、なんだかちょっと、エロいかも……。

下着姿と思われるちまきがすぐ横にいるという状況も相まってか、僕は必要以上に意識してしまう。

外の雨音が、やけに大きく響く。

「寒い……」

「そりゃ、脱いだのなら当たり前……」

「人肌で、温めて……」

「え……ええええっ!?!」

「暖を取るには、それが一番いいのよ……」

「いや、そうかもしれないけど……。それだと、その……僕も脱いだほうが、いいのかな……?」

「エッチ……」

「あ、でも、それは恥ずかしいから、やめておこう!」  
「うん……」

暗いからお互いの顔なんて見えない。

「だけど、おそらく僕もちまきも、茹ダコよりも真っ赤になっているに違いない。」

「ドキドキと脈打つ鼓動は、僕のものか、それともすぐそばに寄り添うちまきのものか。」

「なんだかもう、頭もぼーっとしてきて、なんにも考えられない。」

「ちまきのほのかな甘い匂いに包まれながら、僕たちふたりはマットの上に倒れ込んだ。」

「……そろそろ時間だというのに、除夜はいつたい、なにをやっているんだ」

私はずっと、ちまきに連れていかれた除夜を、この生徒会室で待っていた。しかし、一向に帰ってくる気配がない。

思わず独り言が口から飛び出してしまったが、もちろん誰に言っただけでもない。

ひとりきりの生徒会室。

ここは、こんなに寂しい場所だったのだろうか。

「除夜のやつ、あとでおしおき決定だな」

電話もメールも試してみたが、まったく応答がなかった。私を無視するとはいい度胸だ。

とはいえ、さすがにもう時間がない。

私はカギを閉め、生徒会室を出た。

デュエルの会場は体育館で開始時間は六時半だということは除夜も知っているのだから、遅れるようなら直接向かうだろう。

しかし、体育館に着いても、除夜は結局現れなかった。

除夜が代理で戦うと申請してあったが、本人不在では仕方がない。急遽、私自身が出場するように変更してもらった。

生徒会長自らのデュエル。

それは今年度に入ってから初めてのことで、生徒たちの騒ぎようといったら、凄まじいものだった。

多くの人が私を応援してくれている。

菱餅としては、除夜が相手のほうがよかったに違いない。幼い女の子にしか見えない容姿の彼女ならば、前回同様、確実に観衆を味方につけられただろう。

だが私が相手では、分が悪い。

こう見えて、私は生徒からの人気が高いのだ。うぬぼれではなく、それは紛れもない事実。

会場では、放送部員が熱のこもった実況の声を響かせていた。

遅い時間からのスタートとなるなら観衆など少ないだろう、という私の考えは完全に間違っていたことになる。

大勢の生徒が歓声を上げる中、私は体育館の中央に用意された空間へと歩いていった。

静かに会場入りしたところだったが、私の姿を見つけるやいなや、より大きな歓声が沸き上がってしまった。

ゆっくり歩いたところで、気づかれてしまうのは仕方がないことのようにだ。

そして精神体となった私は、デュエルの舞台となる擬似空間の闘技場へと足を踏み入れた。

「お姉様、よくいらっしやいましたに〜」

「菱餅、なにを企んでいる？ 除夜が帰ってこないのは、お前のせいだろうか？」

「さて、なんのことにゃ〜？」

「しらばつくれるか……。まあ、すぐにデュエルだ。力づくで口を割らせてやる」

「にししし。お姉様は最近、ずっと補佐の射干玉除夜に戦わせてま

したよに〜？ それは自信がないからに違いないと、そう考えたんだによん。それに数ヶ月のブランクがあれば、体は完全に鈍っているはず。しばらくお姉様を観察してみました、とくに訓練しているような様子もなかった……。すなわち今のお姉様になら、ひーちやんでも簡単に勝てるはずなんだじょ！」

デュエル開始のゴングと同時に、菱餅が一直線に飛び込んでくる。体が小さいだけあって、速い。だが……。

「はっ！」

気合い一閃。

「ぐぎゃっ！」

『……………え〜っと……………』

実況も呆然とした声を漏らすのみ。

一撃だった。

たった一撃で、菱餅は地面にめり込んだ。

動けない状態になった彼女が負けを宣言すれば、デュエルはあっさり終わる。

しかし、それだけで許すつもりはなかった。

動けなくなった菱餅を、私は一方的に殴る蹴る投げ飛ばす。

みるみるうちに菱餅の頭上のヒットポイントゲージは減っていき、そして残り数ミリ。

「あ……………愛のムチだじょ……………。これはこれで、快……………感……………」

なんだかご満悦な様子。

「気持ち悪い！」

「ガーン！」

トドメの一撃。

それは蹴りのダメージだったのか、それとも精神的ダメージだったのか。

どちらでも私には知ったことではない。

こうして、私はあっさりと菱餅の挑戦を退け、生徒会長の座を守ったのだった。

デュエル終了後、菱餅に除夜のことを尋ねた。

もちろん胸倉をつかみ、壁に押しつけている状態で。

「ああ、お姉様……。デュエルの精神体だけでなく、実体のほうにも愛のムチをいただけるんです！？ ドキドキわくわくするじゃない！」

などと気持ちの悪いことを言っている菱餅に、ひざ蹴りを食らわせる。

苦しみなながらも恍惚の表情。やはり気持ち悪い……。

そんな菱餅のスカートポケットから、なにかがこぼれ落ち、チャリンと音を立てた。

「む……なんだ、これは？ 体育倉庫のカギ？ ……なるほど、そういうことか」

一瞬で悟った私は、カギを拾い、一目散で体育倉庫へと向かった。焦って震える指先で、なかなか入らないカギをどうにか気合いで押し込んで回すと、ようやく南京錠が外れた。

「除夜！ 大丈夫か!？」

重いドアを引き開けると、体育倉庫の中は暗かった。ドアのすぐ横には、電気のスイッチがあったはずだ。私はそれを手探りで見つけ、スイッチを入れた。

そして目撃する。

マットの上に寝っ転がっている状態で、下着姿のちまきが除夜を抱きしめている……？

「か……会長……!？ あ……あの、これは……!」

焦り声を上げる除夜と、自分の脱いだ制服で下着姿の体を隠すちまき。

「な……なんと、ハレンチな！ それに、除夜は私のものだと言っただけだろっ!？」

私はツカツカとふたりに近寄り、そして除夜の腕をつかんで立ち上がらせる。

「なにをやっていたんだ、お前たちは!」

「いや、疲れて寝てしまっただけで……」

「だったらどうして、ちまきは下着姿なのだ!？」  
「それは、雨で制服が濡れたから……」

私の詰問に、焦りながらも答えを返す除夜。

……しかし、なんなんだ、この気持ちは!？ 胸の辺りがちくちくと痛む、この不快な感じは!？

「そつえば会長、デュエル、どうなりました?」

「……勝った」

「そうですね、よかったですね! でも、行けなくてすみませんでした」

謝られたところで、私の気持ちは一向に晴れることはなかった。

次の日、ちまきは僕と会長に謝った。

どうやら菱餅先輩と共謀して、僕をデュエルに参加させない作戦だったらしい。

エアコムが電波停止になっていたのは、妨害装置をちまきが持っていたからだだった。

そんなこと、普通はできないはずなのに……。というか、そんな装置が存在すること自体、問題なのでは……。

でも、装置は菱餅先輩に返してしまったあとらしく、菱餅先輩本人も口を割らなかつたため、細かく確認することもできなかった。

菱餅先輩って……いったい何者なのだろう?

それに、あれから会長の様子もおかしく、僕の顔をじっと見ては、真っ赤になってうつむいたりすることが多くなったのも気になるところ。

僕はあの体育倉庫で、ちまきとふたりでマットに横になったあと、疲れて眠ってしまっていた。

会長に弁解した言葉は、紛れもない事実なのだ。

ちまきのほうも、前の日になかなか寝つけなかったようで、僕と同じタイミングで眠ってしまったのだという。

ふたりとも、会長が体育倉庫の電気を点けたことで目を覚ました。だから実際、なにもなかった。

電気が点いたせいで、暗くて見えなかったちまきの下着姿は見てしまったわけだけど。

どうでもいいけど、僕たち、どうして電気のスイッチのことまで頭が回らなかったのだろう。

眠気でぼーっとしてたからかな、やっぱり……。

ともかく、会長がこんな様子だと、なんだか調子が狂ってしまつ。会長はいつたい、どうしちゃったのだろう？

その答えは、僕には見つけ出すことができなかった。

僕たちの通う神籠学園に、東京都知事が訪問してきた。都知事は学園長の父親。

だからそれは不思議なことではないはずだけど……。

次回、第九話、都知事の訪問、そして会長は……。

……会長、なんだかちょっと、おかしくないですか……？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8645x/>

---

独裁生徒会長サクラン

2011年10月25日01時07分発行